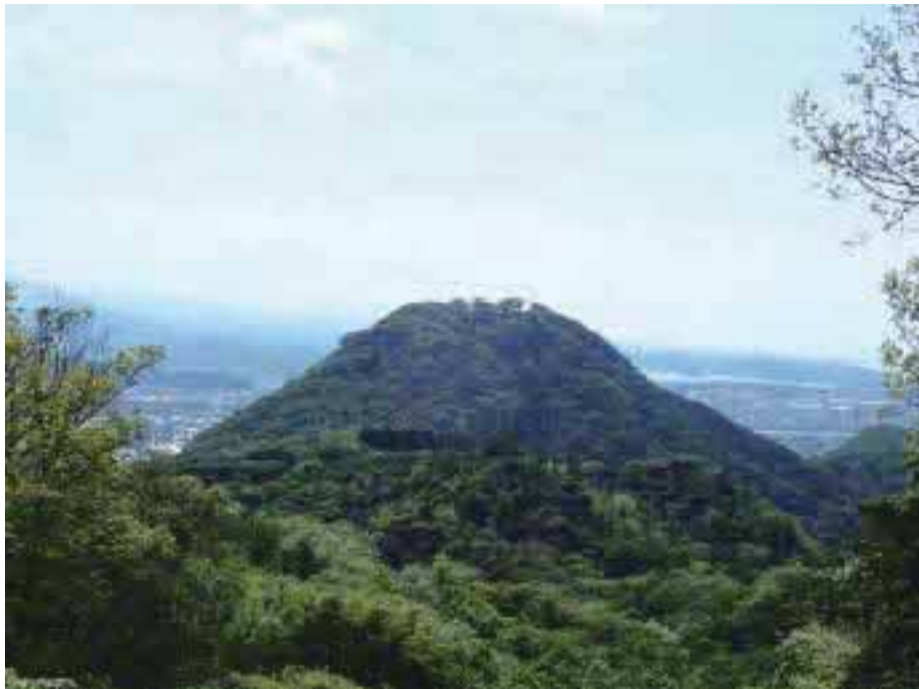


戦国時代の転換点 3つの籠城戦を読み解く

— 安芸郡山城・出雲月山富田城・因幡鳥取城 —



太閤ヶ平から見た鳥取城

鳥取県埋蔵文化財センター

はじめに

鳥取県埋蔵文化財センター

1 中世城館の調査研究（第1期）について

（1）目的

因幡、伯耆は中世前半は山名氏の分国でしたが、応仁の乱以降16世紀になると、西の出雲尼子氏、東の但馬山名氏の間であって親交と抗争を繰り返し、戦国時代も終盤になると、中国地方の雄となった安芸毛利氏、天下統一をめざす織田氏による支配、侵攻を背景にして、境目地域となった西因幡や東伯耆には多くの、また特徴的な城館が造られました。

因幡、東伯耆の城館群の中から、このような地域の戦国史を物語る中世城館、中でも織田氏（秀吉軍）の天下統一の動向に関わるような重要な位置付けができるものについては、貴重な文化財であることから群として広域的にとらえ、その価値を広く紹介するとともに、後世に伝えていきたいと考えています。

（2）背景

①中世城館調査

平成10年度から15年度まで、県内中世城館について悉皆的な分布調査が行われて、概要や縄張図が報告書としてまとめられ（2002年、2004年）、遺跡保存等に一定の効果が認められたものの、遺漏や錯誤があるなど確認調査が不十分などところがあり、成果の検討もこれまで十分に行われてはいませんでした。

②史跡指定

平成18年の米子城、平成20年の若桜鬼ヶ城の織豊期から近世城郭にかけての国史跡の指定はされましたが、中世城館の国・県史跡の指定は平成13年に羽衣石城が県指定された以降は進んでいませんでした。

史跡指定候補となる重要遺跡は多く、本年4月施行の改正文化財保護法の趣旨（地域が文化財の保護と活用を進め、地域づくりやまちづくりに文化財を活用する）に沿って、最近の鳥取城や米子城のように保護と活用に向けて、順次取り組んでいく必要があります。

（3）調査対象（予定）

①因幡 天神山城、鳥取城（西坂）、鶴尾城、鹿野城（流山）、狗戸那城、荒神山城ほか

②伯耆 羽衣石城、羽衣石所在城（十万寺）、馬ノ山、茶白山城、高野宮城、岩倉城ほか

2 考古学フォーラムについて

戦国時代の因幡伯耆は尼子氏、但馬山名氏、毛利氏などの周辺勢力や天下統一をめざす秀吉軍の影響下で、合戦が続き、備えの山城が造られてきました。県内の山城や合戦を知るためには、外部勢力による合戦の歴史を学ぶ必要があります。

今回のフォーラムは、中世城館の調査研究のスタートに当たり、地元気鋭の研究者と中世史の専門家をお招きし、山城に籠城して戦った合戦の実像を明らかにし、従軍した雑兵たちにも光を当て、これまで余り触れられて来なかった合戦の真実とその意義、因幡や伯耆の国人たちが生き残りをかけて戦った真の姿を見て行こうとするものです。

今後の中世城館の調査研究に役立てるのは勿論ですが、地元の皆さまや関係者に調査研究へのご理解とご協力、そしてご期待をもって応援していただけるようお願いしています。

目次

フォーラムを10倍楽しむためのガイド	1
特別講演 戦国の世を生きる人びと—雑兵・軍役・年貢—	3
事例研究1 安芸郡山合戦と城～尼子・毛利・大内の戦略～	11
事例研究2 月山富田城籠城戦～対大内・毛利との攻防と戦前戦後～	17
事例研究3 秀吉の因幡侵攻 - そのとき東伯耆は -	31

因幡・伯耆周辺略地図



鳥取県 2007『県史ブックレット 1 織田vs毛利—鳥取をめぐる攻防—』から引用

- ※ 本資料の無断転載、引用はご遠慮ください。
- ※ 会場内でのビデオ・写真撮影、および携帯電話での録音・録画はご遠慮ください。
- ※ 本フォーラムの記録集を作成する予定です。

フォーラムを10倍楽しむためのガイド

鳥取県埋蔵文化財センター

一 籠城戦

籠城戦というと、打って出ないで、守りに入るイメージですが、勝算はあったのでしょうか？攻城戦では、攻城側の兵力は守備側の3倍（とか10倍など）必要といわれます。

城には反撃の仕掛けが多く、戦術的に守る方が有利とされています。籠城軍は敵を倒すのではなく、味方からの後詰めが来るまで城を守るのが役割で、後詰め軍が来援すると、攻城軍を挟み撃ちにできます。

籠城戦は後詰めが来てくれたら有効な戦術でしたし、籠城が長期に及んだ場合には、兵糧調達や降雪機、農繁期などで攻城軍にとって有利とはいえない状況もあったのかも知れません。

二 3城での籠城戦と因幡、東伯耆のかかわり

(1) 籠城戦と東伯耆

この頃、伯耆は出雲の尼子氏の支配下にありました。尼子氏による安芸郡山合戦にも伯耆南条氏は従軍しています。その後も中国地方の覇権を争う大内氏、尼子氏、毛利氏による戦いにおいて、南条氏は生き残りをかけ、戦の勝者にくら替えしながら従軍してきました。

そして、中国地方の雄として勝ち残った毛利氏による尼子氏との戦いの中で、毛利氏が東伯耆から尼子氏を排除したことで、南条氏は東伯耆に復帰することができました。

しかし、最終的には毛利氏を見切った南条氏が織田方に転じたことで、中国平定戦としての秀吉軍の因幡攻めにも大きな影響を及ぼすことになります。

(2) 籠城戦と因幡

この頃、因幡では尼子方の因幡守護（山名誠通）と反尼子の但馬守護（山名祐豊）が対立していました。大内氏の出雲侵攻で尼子氏が富田城に籠城すると、但馬山名氏は因幡侵攻を図ります。

因幡・但馬の戦いは、結局、但馬山名勢力が因幡を実質支配するところとなりましたが、毛利氏の因幡支配を担った因幡武田氏は、因幡からの但馬山名勢力の排除に成功します。

しかし、毛利氏に対する救援要請もかなわず、山中鹿介ら毛利氏の尼子攻めの残党による再興戦に乗じた、但馬山名係累の山名豊国により武田氏は謀殺されてしまいます。

そして、山名豊国が城主となり、やがて吉川経家が入城する鳥取城に秀吉軍の因幡攻めが行われることになります。

三 3城での籠城戦と秀吉軍による中国平定

信長から中国平定を命じられた秀吉は、毛利氏に与し籠城する三木城を兵糧攻めで制圧し播磨を平定したことで中国平定戦に進みます。

2度目の因幡攻めでは、圧倒的な力で毛利方の城将が籠城する鳥取城を兵糧攻めで落城させ、中国平定の重要な足掛かりとします。羽衣石城に拠る南条氏の離反は、毛利氏の鳥取城救援への妨害になり、戦力分散による毛利氏の山陽作戦への支障など甚大なダメージを与えます。

翌年、備中での毛利氏の援軍との全面对決では、高松城を水攻めで攻略することで、毛利氏と講和し信長亡きあと全国統一へと突き進んでいきます。

あらすじ

鳥取県埋蔵文化財センター

- ① 14世紀末、全国66か国のうち11か国の守護を一族で占め、六分の一殿といわれるほど権勢を振るっていた守護大名山名氏は、將軍足利義満による守護勢力の削減策にあって明徳の乱で敗れ、山名氏の分国は但馬、因幡、伯耆の三か国に縮減し、出雲は京極氏に与えられた。
- ② 15世紀後半、勢力を盛り返した但馬の山名氏と管領細川氏が、畠山管領家などの家督争いに端を発し、東軍西軍に分かれて戦った応仁の乱は地方にも波及。出雲、伯耆でも両勢力による内乱となり、尼子氏の出雲での台頭と伯耆への影響力行使につながった。
- ③ 16世紀前半、中国地方の雄周防の大内氏は、細川管領家の内部抗争に乗り、流れ公方を奉じて上洛し長期にわたって幕政を補佐していたが、領国の不安定化や守護京極氏にかわって勢力を拡大していた出雲の尼子氏に対処するため周防に帰国し、安芸の毛利氏など国人領主を巻き込んで数年に亘り尼子氏と各地で戦いを繰り返した。
- ④ 尼子氏は、毛利氏の尼子からの離脱などを受け、天文9（1540）年に大内氏に与する毛利氏の安芸郡山城に侵攻。小領主で兵力差に劣る毛利軍だったが、大内軍が後詰めで来援するなどしたことで尼子氏は出雲に敗退した。この戦いに参戦していた出雲衆や伯耆衆で尼子氏の敗退を受けて大内方に転じたものがでた。
- ⑤ 大内氏はこの機に尼子氏を倒そうと、天文11（1542）年に出雲の富田城に進攻したが、尼子方の粘り強い戦いや籠城で戦局が膠着し、大内軍に転じていた出雲衆の寝返りなどもあり、大内軍は周防に退却した。このあと勢力を回復した尼子氏は、但馬山名氏の侵攻を受けていた因幡山名氏を支援するため鹿野城にまで迫っている。なお、伯耆の南条氏は後に毛利方に転じている。
- ⑥ 16世紀半ば、毛利氏は、大内氏を下克上で倒した陶氏を破り、旧大内領などに進出した。
- ⑦ その後、山陰にも勢力を広げようとした毛利氏は、永禄5（1562）年に出雲に進攻し、尼子氏の傘下にあった伯耆などへも侵攻していく。数年に亘って尼子方は月山富田城に籠城するも、陣城による完全封鎖などにより、永禄9（1566）年に尼子氏は降伏した。
- ⑧ 毛利氏は富田城を拠点に山陰計略をすすめ、西伯耆は備後杉原氏、東伯耆は南条氏、因幡は武田氏を通じて支配していく。
- ⑨ 因幡では因幡山名氏と但馬山名氏との30年に亘る戦いの末、尼子氏が支援する因幡山名氏は但馬山名氏に敗れ、守護所天神山城は但馬山名氏が奪取していたが、但馬山名氏は毛利氏が支援する鳥取城の因幡武田氏との戦いに敗れて鹿野に退去し、その後、鹿野麓の合戦で毛利方・南条氏ら伯耆衆に攻められ但馬へ退去した。
- ⑩ 天正元（1573）年、因幡武田氏の鳥取城は、山中鹿介ら尼子再興軍の攻略に乗じた但馬山名の傍系山名豊国に奪取され、因幡武田氏は鶴尾城に退去した。尼子党の跳梁に手を焼く毛利氏が、豊国の斡旋で尼子再興軍を支援する但馬山名と和睦したことで、武田高信はそれまで忠勤してきた毛利氏に救援を求めたものを見捨てられ、山名豊国により殺害された。
- ⑪ 東伯耆の南条家でも毛利氏に忠誠だった南条宗勝が不審死を遂げ、南条家に再仕官していた尼子旧臣の勧めなどにより、南条宗勝の跡を継いだ南条元統は織田方に傾いていく。
- ⑫ 天正5年（1577）からの織田対毛利中国決戦において、毛利軍は山陰・山陽・海道の三道並進策をとっていたが、備前の宇喜多氏が天正7年に織田方に転じたことで毛利方の戦略が美作に集中。織田方の秀吉軍は天正8（1580）年因幡に侵攻し、毛利方の諸城を攻略し、鳥取城の山名豊国は降参した。
- ⑬ その後、豊国を追放して鳥取城は再び毛利方に転じ、天正9（1581）年の秀吉の第2次因幡進攻では、毛利方の吉川経家が鳥取城に籠城した。毛利方は吉川元春が救援に赴こうとするも、天正7年に毛利方から織田方に転じた東伯耆羽衣石城の南条氏に阻まれて鳥取城の支援ができず、鳥取城は開城した。
- ⑭ 天正10（1582）年の備中高松城合戦は、本能寺の変が起きたことで和睦となり、中国決戦が終結した。
- ⑮ 織田方と中国地方最大の毛利方との攻防の境目になった中国地方東部において、秀吉による因幡鳥取城攻めと備中高松城攻めが、その後の秀吉の天下統一の重要な足掛かりとなった。
- ⑯ 毛利氏は因但山名間の抗争に着目し、因幡武田氏に対する支援を通じて因幡へ進出したが、但馬山名氏との攻防に加え、尼子残党への対応が毛利氏の因幡支配の維持を困難にし、秀吉方の侵攻を許した。備前の宇喜多氏や東伯耆南条氏らの毛利陣営からの離反は、毛利氏の但馬などの東部戦線の後退につながるとともに、南条氏の羽衣石城における毛利方（吉川氏）との攻防戦などで秀吉による鳥取城落城を容易にした。因幡や東伯耆における動向が秀吉軍に有利に働いた。

戦国の世を生きる人びと—雑兵・軍役・年貢—

伊藤正義（元文化庁主任文化財調査官・元鶴見大学教授）

一. はじめに—本報告の課題—

- ・戦国時代の村町の年貢と軍役負担の実態を解明する。
- ・戦国時代の足軽・雑兵の実態を解明する。

1. 戦国時代の年貢負担率は史料的には不明。

- (1) 江戸時代の年貢の負担率は、「領主の取り分が40～50%、村の保留分が50～60%」が通例。
- (2) 戦国時代の年貢率は江戸時代の年貢率よりも若干低い。
→その分だけ高い軍役・諸役を負担した。
- (3) 江戸時代に年貢率が増額されたならば、農民・在地世界は「太閤検地」と「兵農分離」に反対したはずである。
→「豊臣平和令」による秀吉の天下統一は進まない。
- (4) 戦国時代の村町の年貢と軍役負担の体系を示す史料を探す。
→戦国時代の村町の年貢と軍役負担の実態を示す唯一の史料
→「越後国頸城郡絵図」「瀬波郡絵図」
→図1—「越後国郡絵図」の範囲

2. 17世紀中頃成立の「雑兵物語」から足軽の実態と「雑兵たちの戦場」を推定復元する。

- 「雑兵物語」は、太平の世で足軽たちを訓練するためのテキストとして作成された
- 足軽たちの実態を示す唯一の史料。



図1 「越後国郡絵図」の範囲（東大出版会本）



図2 「越後国頸城郡絵図」模写本の美守郷小泉組の村町／新潟県高田市本（1965年）
太線→郷境 太破線→小泉組の範囲



図3 「越後国瀬波郡絵図」模写本の色部領の村町／同前。
太線→郡境・領境 太破線→色部氏の本領の範囲

二. 太閤の郡絵図、景勝の郡絵図

1. 太閤の郡絵図

郷帳と郡絵図の1セットを後陽成天皇に献納することを名目にして、天正十九年（1591）七月に全国の大名に、検地の結果をとりまとめた「郷帳」と郡絵図の提出を命じた（『多門院日記』同年月二十九日条）。→前年の七月に小田原開城→郷帳と郡絵図の徴収→天下統一と太閤権力が全国の統治権を掌握したことを象徴。

「太閤権力→郷帳と郡絵図を3セット徴収→1セットを豊臣政権が保管、1セットを太閤秀吉が保管→1セットを後陽成天皇に献上→天皇に代わって太閤秀吉が全国の統治権を掌握する→武家摂関家・豊家体制の完成」

2. 景勝の郡絵図

（1）現存郡絵図の作成目的—献納郡絵図と現存郡絵図—

「越後国頸城郡絵図」（340×580cm）と「越後国瀬波郡絵図」（243×693cm）は重要文化財で米沢市・上杉博物館所蔵。

「越後国の郡絵図」→上杉景勝と直江兼続は文禄四年（1595）に「太閤検地」を実施→翌五年に大縮尺（1/5, 200）の頸城郡・魚沼郡が6枚、瀬波郡などの小縮尺（1/6, 700）が4枚の合計10枚の郡絵図と郷帳を作成して太閤秀吉に献納。「頸城郡絵図」に記載の村数は380カ村←→郷帳の村数は358カ村→「頸城郡絵図」は献納本の控図で未完成→献上用の郡絵図と郷帳の村数は一致していたはず→献納用の郡絵図には村町名と村高だけが記載されていたはず→豊臣家の滅亡と共に消失した献納用の郡絵図と現存する2幅の郡絵図は、記載内容と作成目的が異なっていた。

景勝と兼続は、肥前名護屋在陣・朝鮮出兵の軍役負担のために「文禄三年定納員数目録」を作成→軍役負担高を算定するために、献納本の複本に村町が負担する軍役負担高と軍役を負担する家数・人数、年貢高の試算を書き込んだ、軍事用の特殊な郡絵図—「頸城郡絵図」と「瀬波郡絵図」を試作した。

→豊臣政権と太閤秀吉権力が要求する「際限ない軍役負担」に、どれだけ、何年間、在地の村町が耐えられるのかを、景勝権力の膝下の「頸城郡絵図」と遠隔地「瀬波郡絵図」でシミュレーションした→シミュレーション用の郡絵図は「頸城郡絵図」と「瀬波郡絵図」の2幅のみ試作→シミュレーションの結果→3～5年程度で村町は疲弊して崩壊する→景勝・兼続権力は、愕然、慄然した。

（2）現存郡絵図の記載内容と完成度の差

シミュレーション用郡絵図の試作は頸城郡が先行→瀬波郡絵図は頸城郡絵図よりも遅れて試作を開始→用絵図とも記載漏れ、誤謬、二重記載などがあり未完成のまま。

「頸城郡絵図」→①村町名、②領主・給人名、③本納高、④縄ノ高、⑤家数、⑥人数、⑦男女、
⑧里程

「瀬波郡絵図」→①村町名、②領主・給人名、③本納高、④縄ノ高、⑤家数、⑧里程

⑧里程→主要街道の拠点の在町のみ注記。⑥人数と⑦男女は「頸城郡絵図」のみ記載→頸

城郡では上杉景勝権力が村町に直接軍役を賦課。瀬波郡では領主を通じて軍役を賦課→膝下の頸城郡では、景勝権力が村町を直轄領にしていた。遠隔地の瀬波郡では、景勝権力は在来の領主を通じて間接的に支配していた→景勝権力は軍役を負担する人数は把握していない→何人動員するのは、瀬波郡の領主たちが決めた。頸城郡では大半の村町では女性も軍役を負担していた→女性は部隊編成に関する炊き出し・物資調達などの雑役に従事した→頸城郡では迅速な部隊・軍勢の編成体制が完備されていた。

三. 郡絵図での年貢と軍役の負担高

1. 本納高と縄ノ高

「頸城郡絵図」と「瀬波郡絵図」は、「際限ない軍役負担」に在地の村町が何年間程度耐えられるのかをシミュレーションするための特殊な郡絵図→軍役負担高優先で試算した→石高が多い④縄ノ高が軍役負担高→少ない③本納高が年貢負担高→③+④が村の生産高=村高。生産高=村高が多い大村ほど多くの軍役高を負担した。村高が少ない小村・海村・山村は低い軍役高を負担した→小村は雑役・輸送役など、海村は塩焼き、山村は国境警固役。

表1 「頸城郡東絵図」の軍役・兵種の区分

村のタイプ	1人当たりの縄ノ高・免除高	軍役・諸役負担内容
A型	8石以上	騎馬兵士+徒歩の従兵
A B型	8石未満～5石以上※	騎馬兵士+足軽部隊
B型	8石未満～5石以上	徒歩・足軽部隊
B C型	5石未満～3石以上	足軽+小荷駄隊
C型	3石未満～1石以上	非戦闘員の小荷駄隊
D型	1石未満	在村で軍役・諸役を負担する
F型	0. 1石未満	負担する諸役の内容不明◎

※1人当たりの縄ノ高はB型だが、人数がA型よりも多いAとBの中間型。太線=騎馬兵士の有無の区分。太破線=戦闘型と非戦闘型の区分。二重罫線=在村・非部隊編成。◎塩焼きの村

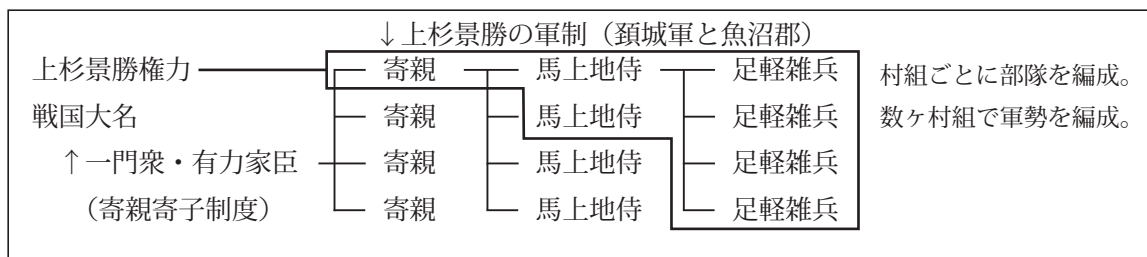


図4 寄親寄子制度と上杉景勝の軍制の比較

村の規模によって、負担する軍役高と軍役の内容が異なっていた(表1)。高田平野の豊かな農村の大村が上杉軍団の戦闘部隊の中核。大村+中規模村+小村を組み合わせ、「戦闘部隊+足軽部隊+輸送部隊」の軍勢を編成した。美守郷の小泉村は16カ村で構成→細い朱線で囲まれた村組は、年貢収納・軍勢編成=生活全部の単位。小泉村は、A型2、B型2、A B型3、B型1、B C型8で、戦闘部隊を中心とする、上杉軍団の中核を構成する村組だった(図2)→軍役負担高=縄ノ高が多いA型・A B型は、村高を超過する縄ノ高を負担しており、不足する縄ノ高を他村から補填されていた→戦闘専門の村落・村組を育成する上杉権力独自の軍制と税制。上杉氏の膝下と直轄地の頸城郡と魚沼郡では、村組ごとに部隊を編成→数カ村組で

軍勢を編成→軍勢は戦国大名の上杉景勝に直結→御一門衆と有力家臣の介在を排除→景勝直属軍団を創出。

K村の郡絵図のD 村高1,000石				c 縄ノ高→軍役負担高
貢納高	平時のK村の免除給付高			平時はK村に補填しない
K村の本納高 150石	C 縄ノ高 150石	C 縄ノ高 150石	C 縄ノ高 150石	K村のC 縄ノ高の超過分 400石↓他村からK村 へ補填する
25%	450石・75%			
免除給付高	戦時のK村の軍役負担高			
B本納高 150石	C 縄ノ高 150石	C 縄ノ高 150石	C 縄ノ高 150石	K村のC 縄ノ高400石 他村から補填する
15%	850石・85%			
K村の国絵図のE 村高600石				
K村の年貢高 240石	K村の免除保留分 360石			K村の削除分400石 ↓他村の村高に変更する
40%	60%			

図5 「頸城郡絵図」美守郷小泉組のK村の縄ノ高と村高の仕組み

2. 郡絵図と国絵図の村高の矛盾—村高を越える縄ノ高—

(1) 郡絵図の縄ノ高が国絵図の村高を超過する特殊な村落 (図5)

「頸城郡絵図」と「瀬波郡絵図」は、文禄四年(1595)の太閤検地の結果に基づいて作成。「越後国正保国絵図」は、17世紀前半の検地に基づいて作成して徳川幕府に提出→軍役=縄ノ高が多い大村では、郡絵図と国絵図で村高が大きく異なっている。「頸城郡絵図」の小泉組の大村のK村の場合は、郡絵図の村高(③本納高+④縄ノ高)1,000石が、国絵図では600石に-400石も減少する→400石は、他村からK村に補填していた縄ノ高→他村から縄ノ高を補填される大村→戦闘専門部隊の中核となる特殊な村落=在村領主・地侍たちが集住する特殊な村落→現在の村も大きな屋敷地が連なる特殊な形態(図2)。

(2) K村の平時と戦時の年貢と軍役負担(図5)

平時のK村は、③本納高150石をの年貢を負担→軍役負担の縄ノ高は春日山城の警固役と軍事訓練費以外はK村に免除給付→K村は免除給付された400石程度を戦費と飢饉に備えて内部保留した。戦時のK村は、他村からの補填分と合わせて850石もの軍役を負担→K村は、本納高の150石を貢納すると再生産を維持出来ない→上杉権力は本納高の150石をK村に免除給付→上杉氏の年貢収納は0になる→K村が再生産を維持するためには300~350石程度が必要→不足分の200石はK村のストックから自弁→K村は、戦時体制が続けば、4~5年程度でストックを使い果たして壊滅する。

文禄四年(1595)の太閤検地=「頸城郡絵図」の小泉組の太閤検地での年貢率は約23%→77%が縄ノ高=軍役負担高→縄ノ高偏重=軍役負担・軍事動員中心の税制と軍制→戦時体制が続けば村町は破綻する→頸城郡・魚沼郡は、戦国大名の上杉氏権力と一蓮托生の在地世界→上杉氏の直轄領の特質。

(3) 上杉景勝の会津移封と軍役負担・縄ノ高の解除 (図5)

上杉景勝は慶長三年(1598)に会津に移封→上杉家中の武士身分は会津領移住して離村→越後国では耕作者が不足して荒廃地が発生した→荒廃地の発生率は、景勝膝下の頸城郡>遠隔地の瀬波郡になる→縄ノ高の比率が頸城郡(約70~80%)>瀬波郡(約60%)の差が荒廃率に落差が生じた要因。

慶長三年に在地の村町の軍役負担は解除→武士身分の会津移住で「兵農分離」を実現→豊臣大名の堀秀政が春日山城に入部→検地を実施→元和四年の村上藩の堀検地とほぼ同じ年貢率40%に改訂→K村の村高600石に改訂→K村の年貢高240石、免除分360石→K村は再生産を維持して、農地を拡大する原資を確保→余剰分をストックして飢饉に備える→村が生存するためのシステムを確立・確保。

「戦国の世」は戦いに勝ち抜いて、村町が生き残ることが最優先→上杉氏権力は、村町が生存するために軍事中心の税制と軍制を作り上げた→頸城郡の村町は、戦国大名上杉氏と一蓮托生の運命共同体。瀬波郡の村町は、在地の領主と一蓮托生の運命共同体→上杉氏とは運命共同体とまでは言えない。

「瀬波郡絵図」の色部氏本領の年貢率は約40%→元和四年(1618)の村上藩検地の年貢率は約40%→近世初期の検地高は太閤検地の村高を踏襲→年貢の増額は行っていない→軍役=縄ノ高の負担の解除→村は生存と再生産のための内部保留が可能になる→村の存続を可能にする徳政→「豊臣平和令」が受容されて、急速に天下統一が果たされた要因→村の存続を確約保証した「徳政の原理」。

(4) 穴だらけの戦国大名権力

戦国大名の領国は、戦国大名の膝下の直轄領と国衆領主の領地では、軍役の負担率と内容、年貢の負担率が異なっていた。戦国大名の権力と支配権は、本城の膝下の直轄領を離れるほど逡減した→戦国大名の領国は、「中心・本城=濃厚→中間地帯=中濃→周辺部=薄い」と色合いが変化するグラデーションになっていた(黒田基樹『関東戦国史』角川ソフィア文庫、2017年)。他の戦国大名と競合する周縁部の山間地などでは、両方に半分づつ年貢と諸役を差し出す「半手・半納・半所務」→戦国大名の支配権は直接的には及ばない→周縁部は自立性が強い→有力社寺と在地の霊場も自立性が強くて、戦国大名権力は不介入→戦国大名権力の空白地帯が全国に点在していた→穴だらけでスカスカでマダラ模様の戦国大名権力。

四. 『雑兵物語』の雑兵たち

『雑兵物語』は、太平の世で足軽たちを訓練するためのテキストとして、17世紀の後半頃に作成されて、歩兵訓練用の教科書として流布した。「雑兵物語」は足軽たちの実態を示す唯一の史料で彩色の挿画が付いている。国立公文書館と東京国立博物館に良本が現存。著者・作者は松平信綱(家光側近の知恵伊豆)の第五子の高崎城主の松平信興と周辺の人びと。詳細は不明。最終記事は明暦三年(1657)の「明暦の大火」(振り袖火事)。三河弁と関東弁が入り交じった江戸弁の成立過程をしめす史料で、主に国語史の研究で活用された。

『雑兵物語・おあむ物語』中村通夫・湯浅幸吉郎校訂、岩波文庫、1943年。

『雑兵物語』吉田豊訳、教育社、1980年。

新版『雑兵物語』かもよしひさ、現代語訳・挿画、バロル舎、2006年。

1. 城下町に集住した足軽

太閤秀吉の天下統一が完成して「戦国の世」が閉幕→「太閤検地」によって「兵農分離」が実現→武士身分に分類された足軽・雑兵たちは城下町の町端れの「足軽町」、「中間町」に集住した。寛永十四・十五年（1638）の「島原の乱」を最後に、国内の戦場は完全に閉鎖した。足軽たちの技術と心得を伝えるために、元足軽たちの古老から実戦での技術と心得を聞き取りして『雑兵物語』を作成した。

上杉景勝の領国では、文禄四年（1595）に「太閤検地」を実施したが、「兵農分離」は実現されなかった→在村武士・地侍・足軽兵士たちは農村に在住して、農業経営に従事し続けた→「頸城郡絵図」、「瀬波郡絵図」の世界。「太閤検地」＝「兵農分離」ではない。「兵農分離」が実現されないと、本格的な城下町は形成されない。薩摩藩の士族の比率は、明治四年（1871）の版籍奉還時点での全国平均が5%なのに対して約25%であった。島津家の分家の都城島津領の士族の比率（足軽・中間の最下級武士の卒属も含む）は、42～43%で、下級武士は在村して営農しており、「兵農分離」していなかった。人口の約半分が武士身分で、ほとんどが在村して営農していた都城島津領は、戦国時代の在地世界の実態に近い（米窪明美『島津家の戦争』ちくま文庫、2017年）。

2. 『雑兵物語』の足軽と雑兵たち

（1）荷宰領の八木五蔵と夫丸の馬蔵（雑兵物語挿図①）

荷宰領の八木五蔵は、小荷駄隊の分隊長で、5～10頭の駄馬と夫丸を引率指揮した。「八木」は「米」の意味・隠語。五蔵が指示した心得—食料が不足したときは、味方でもよその部隊から食料を奪い取る。敵の領地に入ったら何でも奪っておけ。いくさのあいだじゅうは飢饉だと思って、喰うことかができるものはなんでも拾っておく。逃げ出した奴らは、運びきれない米や着物を家の中の土間を掘って埋めておくもんだ。家の外に埋めるときは、鍋や釜に押し込んで穴に入れて、その上に土を掛けておく。霜の降りた朝に見れば、物を埋めてある場所だけは必ず霜が消えている（霜が立たない）。よくよく注意してあたりを探して、埋めてある物を掘り出せ。敵地に井戸があってもその水を飲んではならない。敵は逃げるときに井戸に糞をぶち込んでおくもんだ。

五蔵は籠城の時の水と食糧の必要量と心得を示している—1日に1人当たり、水は1升、米は6合、塩は10人で1日1合、味噌は10人で1日2合の計算になる。米を渡す時に5日分以上の米を渡してはいけない。酒飲みに10日分の米を渡すと、8・9日分の米で酒を作ってしまう、飢え死にすることになる。→小荷駄隊の分隊長の五蔵は、籠城戦時の水と食糧の計算と食糧の分配方法に付いて、習熟した知識を持っていた→五蔵は「頸城郡絵図」のBC型の「足軽+小荷駄隊」の軍役負担に相当する（表1）。

夫丸の馬蔵は、もともとは武士であったが、百姓に落ちぶれて、戦場に出てくる前は、馬に菜っぱや野菜を付けて村から江戸へ運ぶことを生業にしていた。馬蔵の心得—戦場は飢饉と同じなので、陣中では乞食の生き方を手本にするのが一番である。夫丸の馬蔵は、馬の扱いに習熟していたので、小荷駄隊に臨時雇いされた→馬蔵はC型の「非戦闘員の小荷駄隊」の軍役負担に相当する（表1）。

(2) 馬のランク分け (雑兵物語挿図①②③④)

宰領馬→鞍の下に大きな泥障を敷いて、たてがみを編んだ立派な美馬→部隊長の乗馬 (雑兵物語挿図②)。馬取が世話する2頭の馬→騎馬武士の乗馬 (雑兵物語挿図③④)。夫丸の馬蔵が引く駄馬 (雑兵物語挿図①) →馬蔵は自分の駄馬を引いて戦場稼ぎに雇われた (雑兵物語挿図①)。雑兵物語挿図④では、馬取藤六・金六、沓持吉六が戦いの後の軍馬の手入りを解説している。馬取たちは馬の世話、取り扱いのプロ。

(3) 槍組小頭の長柄源内左衛門 (雑兵物語挿図⑤)

源内左衛門の心得—槍は突くものではない。槍の穂先をそろえて、拍子をあわせて、敵の槍の上から叩け→兵農分離して城下町に集住した足軽たち→足軽たちは、どの兵種でも、兵種ごとに訓練していた→上杉氏は、村ごとに兵種と役割を分担させて、定期的に在地で軍事訓練を実施して、練度と忠誠心を高めて、直属の軍団を形成した→城下町を形成して、足軽たちを集住化することを指向しなかった。

(4) その他の兵種と技術

雑兵物語挿図⑥→持筒の筒平・鉄平。⑦→矢箱持の矢蔵・寸頓。⑧→草履取の喜六兵衛と挟箱持の弥六兵衛。⑨槍担の古六と並中間の新六。⑩負傷者の手当→若党の左助、草履取の加助、夫丸の弥助・茂助。足軽たちは具足を付けている。若党・槍担・並中間・夫丸は具足を付けていない。雑兵たちの間でも身分差があった。脇差しを差していない夫丸の馬蔵①と差している若党の左助と夫丸の茂助⑩→脇差しを差している若党・槍担・並中間・夫丸は戦闘要員で武士身分。差していない夫丸の馬蔵①は非戦闘要員の雇人で百姓身分。足軽たちは各兵種のプロで、専門的な知識と技術を持っていた→『雑兵物語』で伝えた足軽たちの専門的な知識と技術と心得→「太平の世」での足軽たちの訓練のためのテキストとして使われた。

五. おわりに—雑兵たちと戦国大名—

- 専門的な知識と技術を持った足軽と雑兵たち→豊臣大名は兵農分離して城下町に足軽たちを集住化させて、兵種ごとに訓練した。
- 上杉氏権力は、村ごとに兵種と役割を分担させて、村組単位で部隊を編成した→軍役負担中心の「頸城郡絵図」の税制と軍制。
→村と村組は定期的に軍事訓練を実施して、練度と忠誠心の高い、大名権力に直属する軍団を形成した。
- 在地の村町の武力の上に立脚する戦国大名上杉氏の軍事力と権力。

上杉氏の軍制→上杉家の存亡を賭けて戦う 直属軍団の成立。

→直属軍団を形成したのが戦国大名→直属軍団の規模が大きいのが強い戦国大名

→直属軍団を持たないのが守護大名。

事例研究 1

安芸郡山合戦と城 ～尼子・毛利・大内の戦略～

秋本哲治（安芸高田市教育委員会）

はじめに

- ・郡山合戦のイメージ（元就の籠城戦、寡兵が大軍に勝利、軍着物でのエピソード）
- ・郡山合戦の再検討（城跡、尼子の視点、一次史料）→郡山合戦は籠城戦？

1 安芸郡山合戦とは

- (1) いつ：天文9年(1540)9月から翌10年1月（約4ヶ月間）
- (2) どこで：安芸国吉田周辺 →中国地方のちょうど中心 図1
- (3) だれが：出雲尼子氏が安芸毛利氏を攻め、周防大内氏や安芸国人が後詰で参戦
- (4) どうした：広域的な戦闘が繰り広げられ、最終的には毛利・大内軍が尼子軍を撃退
- (5) なぜ：安芸での大内方最前線が毛利氏の本拠吉田+毛利氏の影響力の増大化

2 航空レーザ測量を活用した城跡調査

- (1) 赤色立体地図：航空レーザ測量データを元に、地形を赤と白で表現した地図
- (2) 山城調査の変化：「マニアの世界」から「誰が見ても人工的な凹凸だとわかる」ものへ
◆遺構の有無に加え、郭の整地や切岸の傾斜の程度が色の濃さに反映
- (3) 新たな発見：既存の城跡の詳細が判明し、郡山合戦に関係すると思われる新たな遺構も

3 郡山合戦の経過と陣城跡

- ★詳細な経緯は「毛利元就郡山籠城日記」に記載（毛利側の史料） 史料1
- (1) 合戦前 前哨戦「犬飼平」での足止め？→史料・遺構なし
 - (2) 合戦前半 多治比着陣、青山三塚山陣替、池内合戦 図2
 - (3) 合戦後半 陶軍着陣、宮崎長尾（伯耆国人南条・小鴨氏在陣）合戦、三塚山合戦
→陣城跡の色の違いが在陣期間や目的を示すのでは？

4 尼子・毛利・大内の戦略

- (1) 尼子の戦略：極力犠牲を出さずに毛利氏を牽制しつつ、南（西条）の大内軍を攻撃
◆遠巻きに様子見～陣替し湯原隊を出陣させるも敗退～守り重視に転換
※南条、小鴨、湯原、三沢、吉川らは宮崎長尾に在陣→合戦後に大内・毛利方へ
- (2) 毛利の戦略：大内氏の援護を頼りに、尼子軍にジャブを打ちながら長期戦へ
◆敵の攻撃に対応した迎撃戦～広域でのゲリラ戦～大内軍と連携した城攻め
- (3) 大内の戦略 2段階で重臣を後詰に派遣し、尼子軍を直接叩く
◆第一弾で杉隆宣を坂に布陣～第二弾で陶隆房を山田中山へ～犠牲を厭わず総攻撃

5 尼子氏から見た郡山合戦の再評価

- 詮久は郡山城攻略や毛利氏の殲滅よりも、大内軍を叩かないと意味がなかった
- 動員した国人衆への求心力が弱く、尼子本隊と一体的な作戦ができなかった
- 尼子軍と大内軍の主力同士の合戦自体は「引き分け」で尼子軍自らが撤退

史料 1

毛利元就郡山籠城日記

《毛利家文書286》

天文九年秋至藝州吉田尼子民部少輔發向之次第

① 一九月四日、至多治比取手罷立国々之事、出雲、伯耆、因幡、備前、美作、備中、備後、石見、安藝平国、此勢打入之時三万也、

② 一同五日、吉田上村江打出、家少々放火、此日者不及合戦候、

③ 一同六日、太郎丸其外町屋等放火、此時尼子衆先懸之足輕數十人討捕候、

④ 一同十二日、後小路放火、此時大田口にて大合戦候、敵には高橋本城を始として数十人討捕候、味方ニハ井原之樋爪、渡辺源十郎二人討死、**広修寺繩手、祇園繩手両口合戦、互死人なく候。**

⑤ 一同廿三日、**青山三塚山江尼子陣替、此時敵本陣風腰山を二陣此方ヨリ焼崩候、**

⑥ 一同廿六日、至坂豊島敵動候之處、杉次郎左衛門尉、小早川中務少輔依為**坂在陣、取向候、**左候處、元就手衆馳合、路二里之間送り付候而、湯原弥次郎其他數十人討捕候、

⑦ 一同十一月十一日、敵いつものことく、郷内打ちおろし候處、元就仕懸追崩、既敵陣青山搦際追込、三沢三郎左衛門尉、福頼、中西以下数十人打捕候、味方ニハ福原親類一人討打死、

⑧ 一大内勢陶五郎、十二月三日為後卷、**山田中山江山陣、勢数一万也、**

⑨ 一同十一月十一日、両陣手合、此日於**宮崎長尾、敵者伯耆南条、小鴨、雲州高橋、藝州吉川、味方ニハ毛利穴戸衆合戦、敵一兩人討捕候、味方無死人候、**

⑩ 一翌年正月三日、於相合口合戦、敵十余人討捕候、味方一人も無越度候、

⑪ 一同十一月十一日、陶五郎、郡山尾つゝき天神尾江陣替、

⑫ 一同十三日、**敵陣宮崎長尾江元就仕懸、則切崩、三沢、高尾始として、宗従者二百人余人討捕、其儘敵陣焼跡ニ切居候、此日陶衆と三塚陣衆合戦候而、陶被官深野平左衛門尉、宮川以下十余人討死、敵には尼子下野守討死、**

⑬ 一同十三日夜、其まゝ尼子陣退散、敵却口を送り候、大ふし山の雪ニ漕草臥、石州江乃川にて、或船を乗り沈メ、或渡りへ追ひたされ、死候者更不知其数候、先年道永天王寺御崩之時、於渡辺川死候趣之由申候、

⑭ 一因茲、備中、備後、安藝、石見、多分、防州一味候、

⑮ 一近日大内義隆有渡海、雲州可有乱入催半候、

⑯ 一上口之儀、此時可被押下事肝要候、

⑰ 一去年九月四日ヨリ今年正月十三日之間、於通路討捕、日々於野伏射殺候不知数候、定而可有其間候条、不能申候也、

天文十年二月十六日



図1 中国地方関係位置図 (地理院地図に加筆)

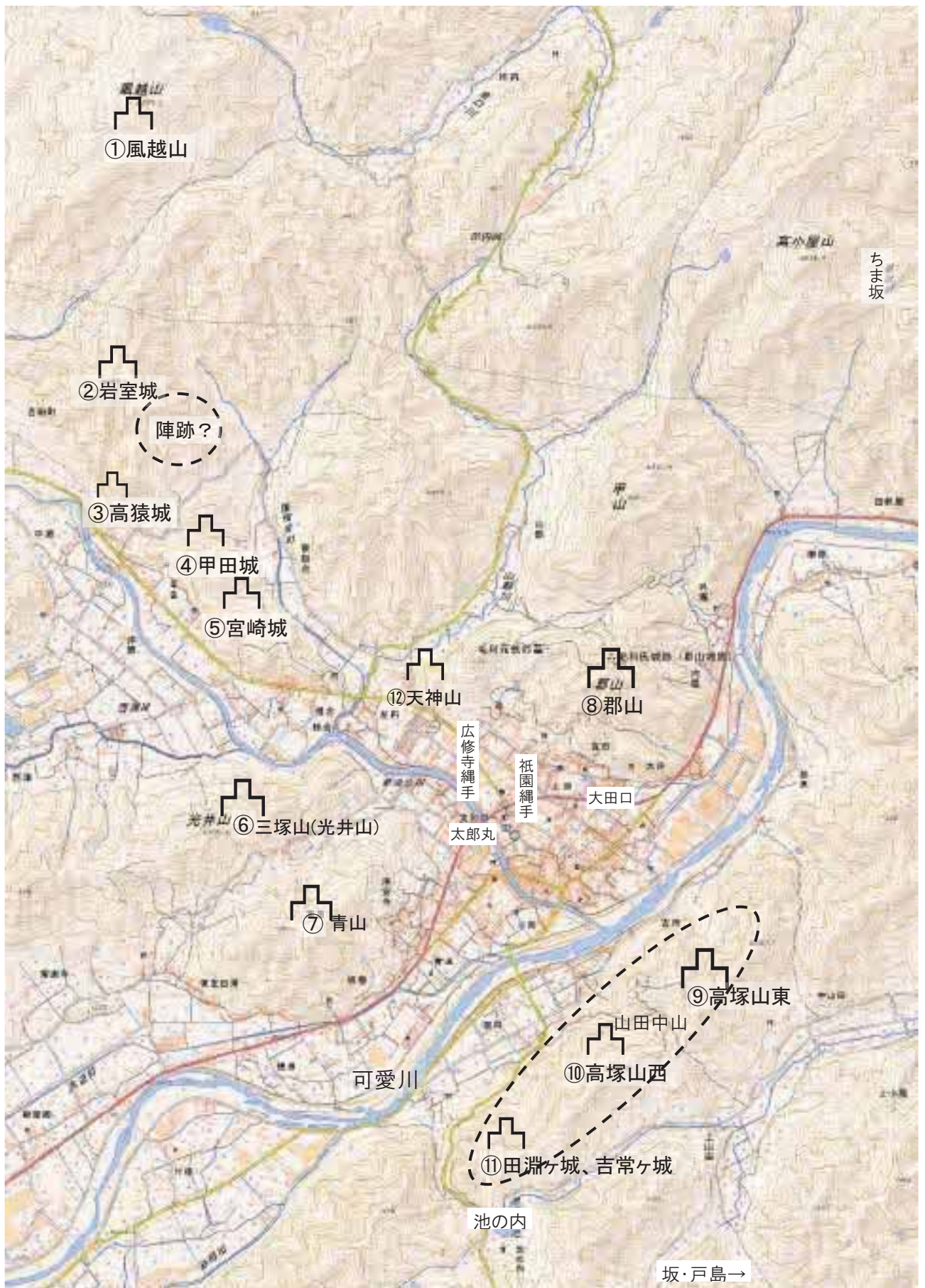


図2 郡山合戦関係陣城位置図（地理院地図に加筆）

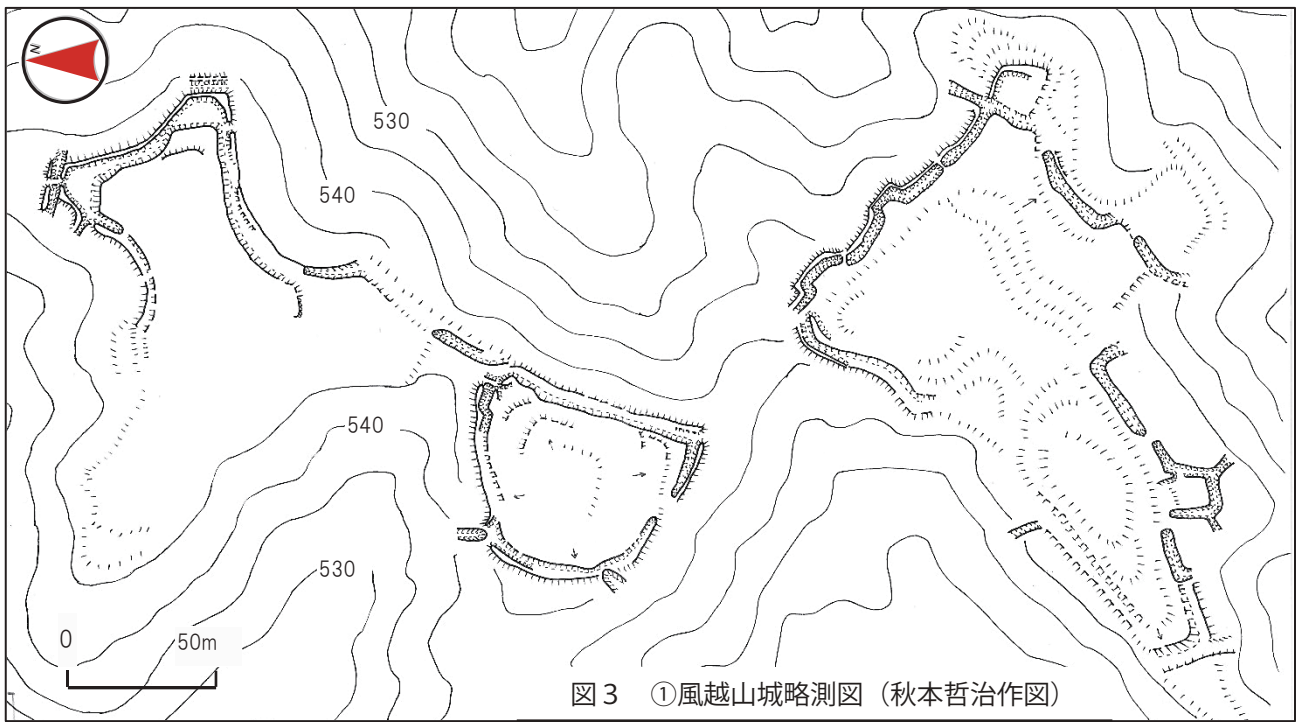


图3 ①風越山城略測図（秋本哲治作図）

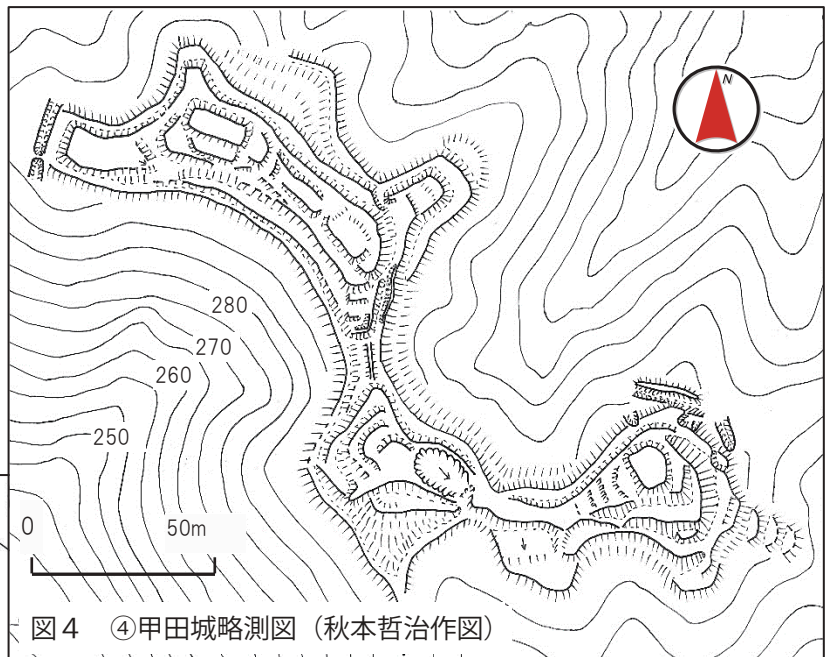


图4 ④甲田城略測図（秋本哲治作図）

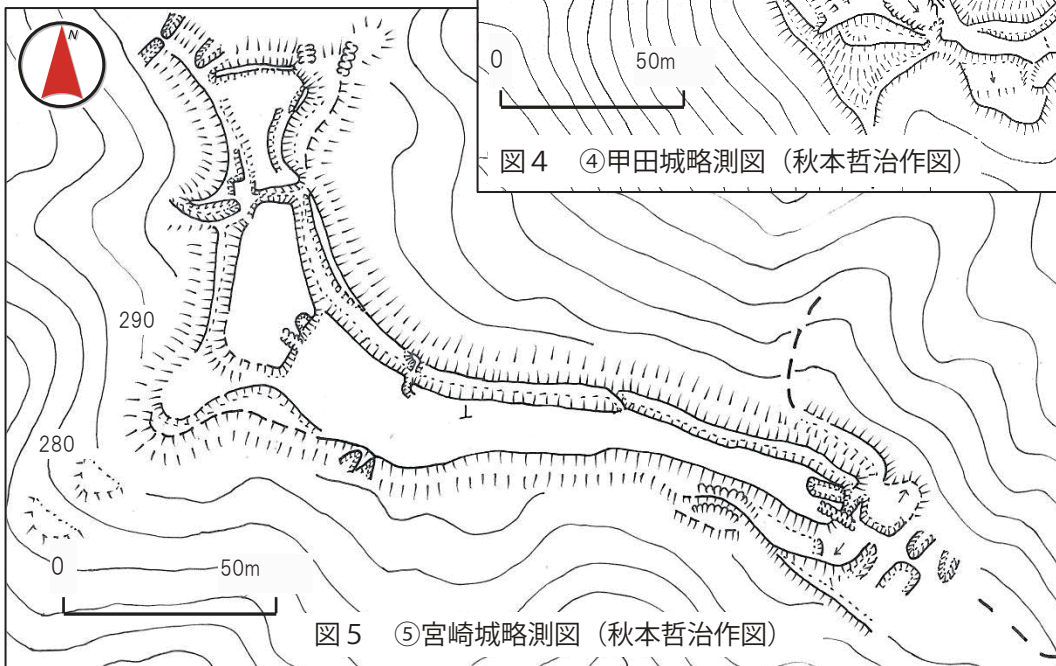


图5 ⑤宮崎城略測図（秋本哲治作図）



图6 ⑥光井山城略测图（秋本哲治作图）

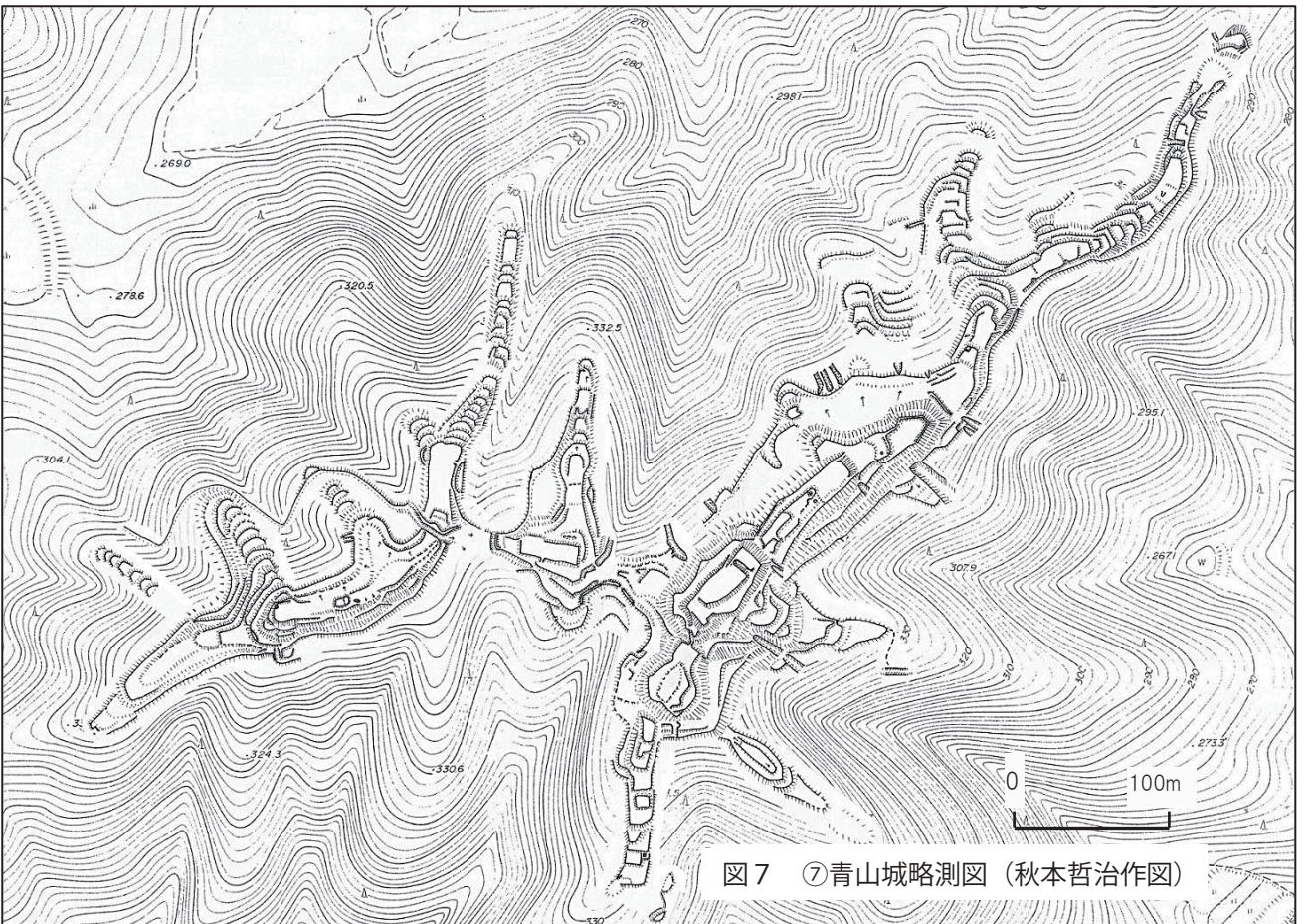


图7 ⑦青山城略测图（秋本哲治作图）

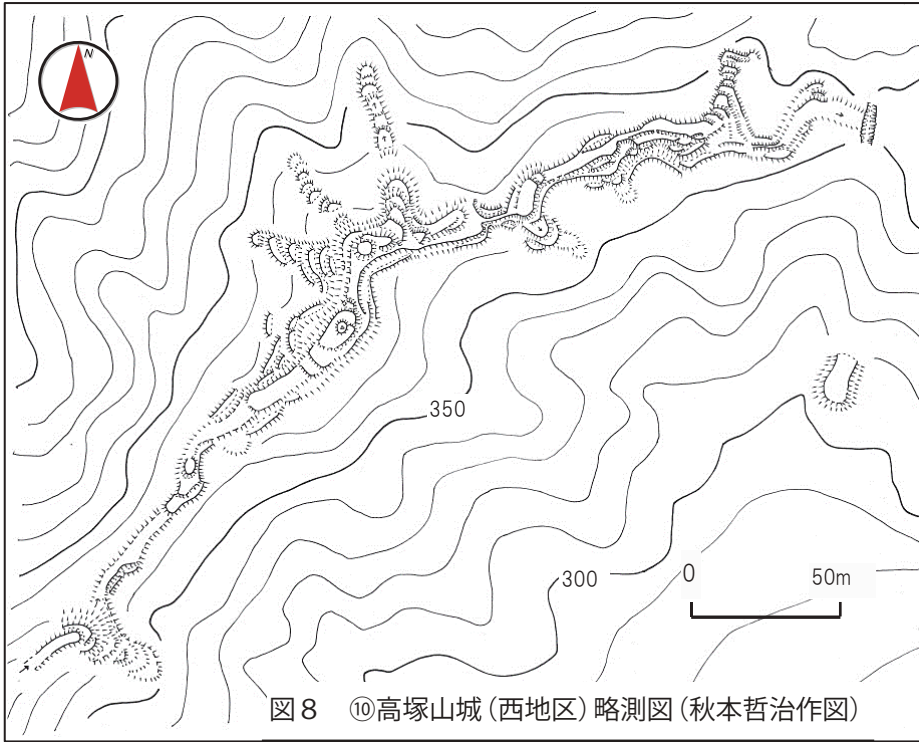


图8 ⑩高塚山城(西地区)略测图(秋本哲治作图)

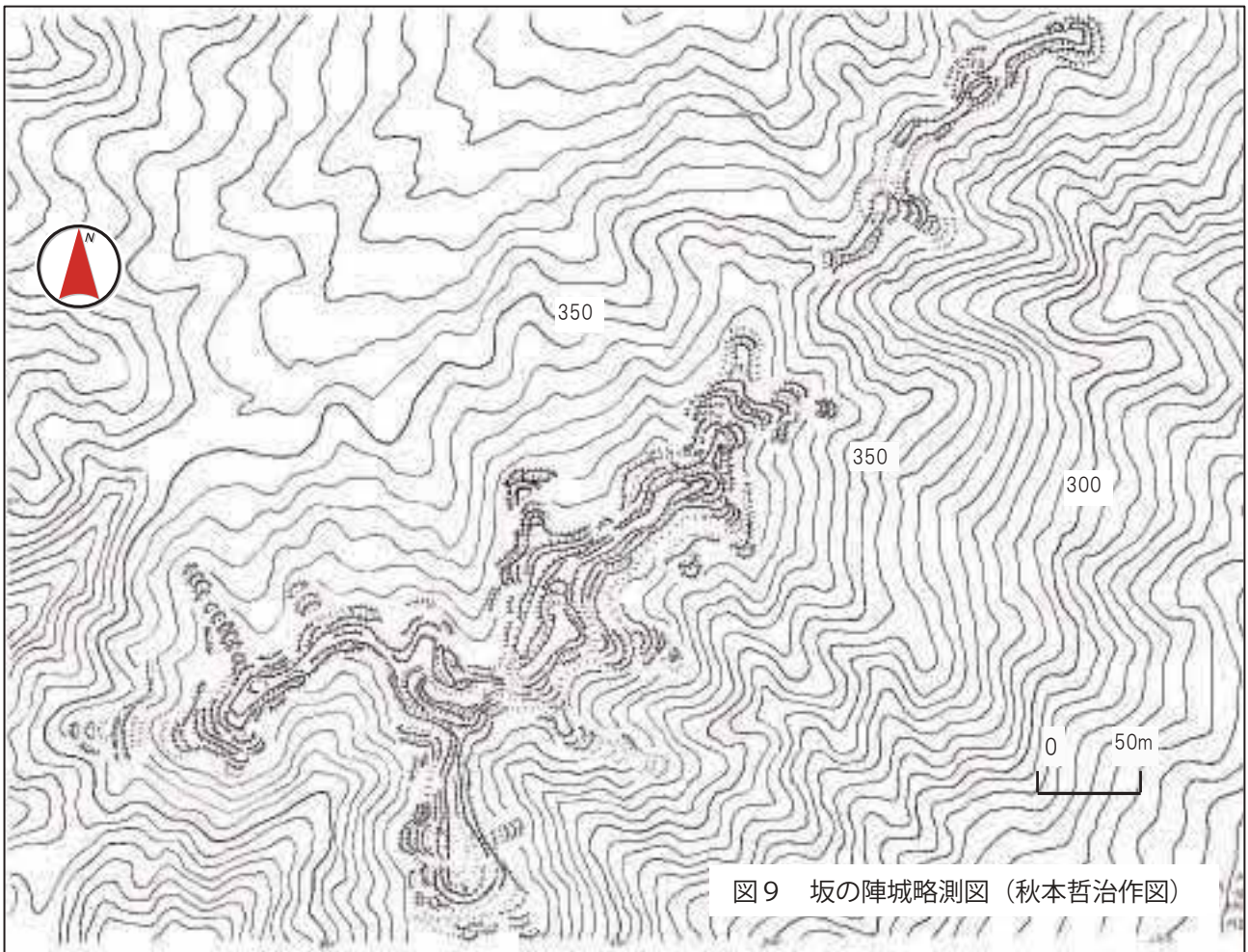


图9 坂の陣城略测图(秋本哲治作图)

事例研究 2

月山富田城籠城戦～対大内・毛利との攻防と戦前戦後～

高屋茂男（島根県立八雲立つ風土記の丘）

1 大内対尼子

(1) 合戦に至った背景

永正から大永年間、さらに天文年間にかけて尼子氏は、石見、伯耆、因幡へ勢力を拡大した。伯耆では伯耆山名氏の内部対立に乗り、勢力を拡大していく。因幡山名氏も但馬山名氏から離れ尼子氏に接近を見せる。尼子氏は塩冶興久の乱の平定により、安芸や備後へも勢力を拡大していく。その後大内氏は大友氏との和平交渉が進み、東方へ関心が転じると、大内氏・毛利氏と尼子氏の対立が激化していく。尼子氏はさらに備中・美作を制圧し、播磨へ侵攻した。

天文8年、尼子氏は安芸の武田氏と連携し毛利氏と対立し、翌天文9年には大内義隆自身も兵を率いて、尼子方の勢力排除に動き出した。そして天文9年8月、尼子経久は吉田郡山城へ向けて出兵し、翌10年正月に尼子方は敗退した。

10年10月には尼子経久が死去し、これを好機とみた大内氏は11年初頭にかけて準備をし、4月には出雲へ侵入するも赤穴・瀬戸山城攻略に時間がかかり、12年3月に富田城を攻撃する。

(2) 合戦の概要

大内の領国だけでなく、その影響下にあった諸勢力が軒並み参加している。奥出雲から北上するルート、石見西部から東進するルート、水軍衆の三手に分かれて天文11年前半から翌年5月にかけての長期戦となった。まず天文11年7月に赤穴氏の瀬戸山城が落ち、出雲の諸勢力が大内方になびき、「富田城一城二成行候」と尼子晴久は報じている。

天文12年3月に富田城攻めは始まり、4月に菅谷口合戦、5月に塩谷口合戦が繰り広げられるも、出雲国衆の離反により中断された。大内方は撤退時に追撃をうけ、多くの戦死者を出した。大内氏は寺社領や公家領を保護する立場をとったこともあり、それらを実質的に支配していた出雲国衆の離反の背景となり、合戦の苦戦や尼子方の寝返り工作もあり、大内方は敗北した。

(3) 合戦が因幡に及ぼした影響

天文9年の安芸郡山城攻めの際には、因幡・伯耆の国人も尼子方として参陣しており、尼子氏の勢力が伯耆・因幡に及んでいることがうかがえる。当時因幡守護であった山名誠通(のぶみち)は、「久通」と改名しているが、尼子晴久の「久」の字を与えられたものと考えられる。そのため天文年間の半ばには因幡は尼子氏の影響下にあったものと判断される。その後但馬守護山名祐豊が大内氏と連動して因幡へ侵攻し、天文14年以降に因幡守護山名久通は没落し、尼子氏の勢力は排除された。

天文12年の大内氏による富田城包囲の際には、出雲国内だけでなく伯耆の南条氏のように尼子方から大内方へ寝返るものも現れた。戦いに勝利した尼子氏は改めて伯耆に対する支配も強め、備中・美作へ侵攻する。これにより伯耆を退去した国人たちが但馬山名方を頼って逃れていることがうかがえる。

(4) 合戦の勝敗を分けたもの

富田城籠城戦は大内氏の思うに任せず長期化し、味方していた出雲の国人たちも再び尼子方へ寝返り始める。大内氏は京都の寺社領などの安堵をしているが、そのことは大内氏に味方した出雲国人たちからすれば、自身が影響力を持っている領地を返還することとなり、反発を招いた可能性がある。このように大内氏の態度も勝敗に影響をもたらしたと考えられる。

(5) 大内方、尼子方の勢力、中でも伯耆、(因幡) から参陣した国人の合戦での様子

伯耆では南条氏が富田城攻めに参加していることが確認できる。南条氏は伯耆を退去しており、因幡や美作に在国していることが伺える。

(6) 合戦の勝敗が大内氏、毛利氏、尼子氏に及ぼしたもの

大内氏は敗北により、有力武将や跡継ぎを失ったものの、軍事活動に関する影響は限定的であった。

富田城籠城の際には多くの尼子方の国人たちが大内方に味方しており、改めて支配を強化する必要が生まれ、出雲・石見の支配を回復し、伯耆・因幡へ勢力の拡大を志したが、因幡では但馬山名氏と争い、尼子氏は因幡での影響力を失う。

2 毛利対尼子

(1) 合戦に至った背景

毛利氏は大内義隆が滅びた後、大内義長をかついだ陶晴賢との戦いに勝利し、周防・長門を攻略した後、石見銀山をめぐるに尼子氏と対立した。永禄3年(1561)に尼子晴久が亡くなると、義久が跡を継ぎ、永禄3年に尼子氏と毛利氏とは室町幕府の仲介をうけ和睦している(雲芸和議)。4年に至っても継続しており、両者の対立は石見方面でも落ち着いていた。しかし石見の福屋氏が毛利方の福光城を攻撃したことで、毛利氏は福屋氏を滅ぼし、尼子方の多胡氏も敗れて敗死した。石見・山吹城の本城常光が毛利氏に降伏し、一気に石見は毛利氏が制圧した。尼子方は晴久の代に一族の新宮党の国久らを滅ぼしており、家臣団の不和もあり、出雲西部、南部の国人が一斉に離反することとなった。

(2) 合戦の概要

永禄5年正月には出雲の湯原春綱が毛利方に組し、6月には赤名久清が毛利氏についた。毛利氏は伯耆日野・山名藤幸を支援して、備中の三村家親、因幡の武田高信とともに尼子氏を包囲した。7月には三沢氏、三刀屋氏などの出雲国衆が毛利氏についた。

しかし永禄5年11月5日に毛利氏は本城常光を出雲・宍道の陣所で討ち果たすと、毛利氏に就いていた熊野氏、米原氏、松田氏などが離反し尼子方に味方した。

永禄6年には出雲・津田、大東、中蔵などで合戦が起こっている。それ以前に永禄5年9月には、因幡の武田氏、備中の三村氏や備後の勢力が富田城近辺へ押し寄せ、次第に尼子方が不利となっていった。西伯耆の行松氏の尾高城、河岡氏の河岡城も毛利方に組した。西伯耆では激しい戦いが行われるものの、備後の上原氏に出陣させ備後国衆宮景盛、毛利家臣杉原盛重、伯耆国衆山名藤幸らに命じ尾高城、河岡城を守備させ、毛利方が持ちこたえた。永禄6年8

月4日に毛利元就の嫡男の隆元が死去し、その弔い合戦として出雲・白鹿城を攻撃する。白鹿城では激しい戦いが行われ、本丸を残すのみとなった。10月に白鹿城は落城し、松田誠保は隠岐に逃れ、牛尾久清ら籠城宗衆は富田城へ送られた。これにより富田城は孤立していく。この後、永禄6年末から7年にかけて毛利氏は出雲・伯耆堺の長台寺城、天満要害などを攻撃し東から富田城へ迫っていく。毛利元就は宍道湖畔に荒隈城に入り、隠岐も制圧し、富田城包囲網を狭めていく。8年正月には毛利方は富田城西方の福良城や安来の十神城を落とし、熊野城も毛利氏に降伏したことで、完全に尼子氏の勢力は富田城周辺に限られていくこととなった。

この頃には富田城から投降してくるものも増えた。永禄8年4月16日、毛利輝元、吉川元長の初陣として出陣し、出雲・星上山に本陣を置き、八幡山・浄安寺山から飯梨川下流の植田の丘陵部に軍勢を置いた。『二宮佐渡覚書』では元就は「京羅木」を本陣とし、富田城向かいの「たつ山」を向城としたとしている。『森脇覚書』では「ほしかみ山（星上山）」とし記述に違いがみられる。しかし京羅木山や「たつ山（勝山）」には、畝状空堀群をともなう城郭遺構が確認できる。また星上山と京羅木山は同一山塊に位置するので混同されたものであろう。

5月には富田城麓の「市庭」で合戦が行われ、尼子麾下の蜂屋掃部が鉄砲で毛利方を攻撃している。この頃の戦いで毛利方は尼子家臣の池田宗八、遠藤以下を討ち捕り、麦薙ぎを行っている。また、毛利方は星上山にて原弥四郎を討ち捕り、富田城麓中須では尼子家臣福間与一左衛門も討ち取られている。また5月20日には富田城金尾表で合戦が起こり、24日には松尾中壘で合戦が起こっている。

このような状況下、11月には富田城から牛尾幸清、久清が退去し、宇山久信父子は毛利氏への投降が露見し殺害されている。

永禄9年5月「七曲口」で両軍は衝突した。6月には毎日50人から60人の脱走者があったという。ついに永禄9年11月21日、尼子義久、倫久、秀久らは毛利氏に投降した。

このような経過で毛利氏による富田城包囲は行われたが、けして悠然たる包囲ではなかった。永禄9年8月18日の毛利元就感状によると、「敵向山」に毛利方の捨て置かれていた旗が熊谷信直によって回収され、吉川元春を経て毛利元就のところへ届けられている。つまり毛利方もけして高みの見物ではなかったのである。

『雲陽軍実記』や『陰徳太平記』では詳細に合戦の様子が記されるが、脚色や誇張も含まれているものの、1次史料とリンクする部分もあり参考とする程度にとどめる。

(3) 合戦が伯耆や因幡に及ぼした影響

伯耆では江尾城の蜂屋氏や日野衆らが尼子氏に味方するが、毛利氏によって滅ぼされている。その他尼子氏が伯耆へ進出する中で、国外へ逃れていた国人たちが、毛利氏が富田城を包囲する過程で、次々と帰国を果たしている。行松氏が尾高城、南条氏が羽衣石城、淀江には村上氏などがそれである。その他、河岡城の河岡氏や八橋城の城衆も毛利方となっている。

(4) 合戦の勝敗を分けたもの

毛利氏は大内氏による富田城攻めを経験し、力攻めを行わず、兵糧攻めを行っている。白鹿城へ援軍として入っていた牛尾久清は富田城へ移送されており、富田城内は窮乏していく。実際に富田城を退去するものが増えている。また十神山（安来市）を落とし、富田城の外港で

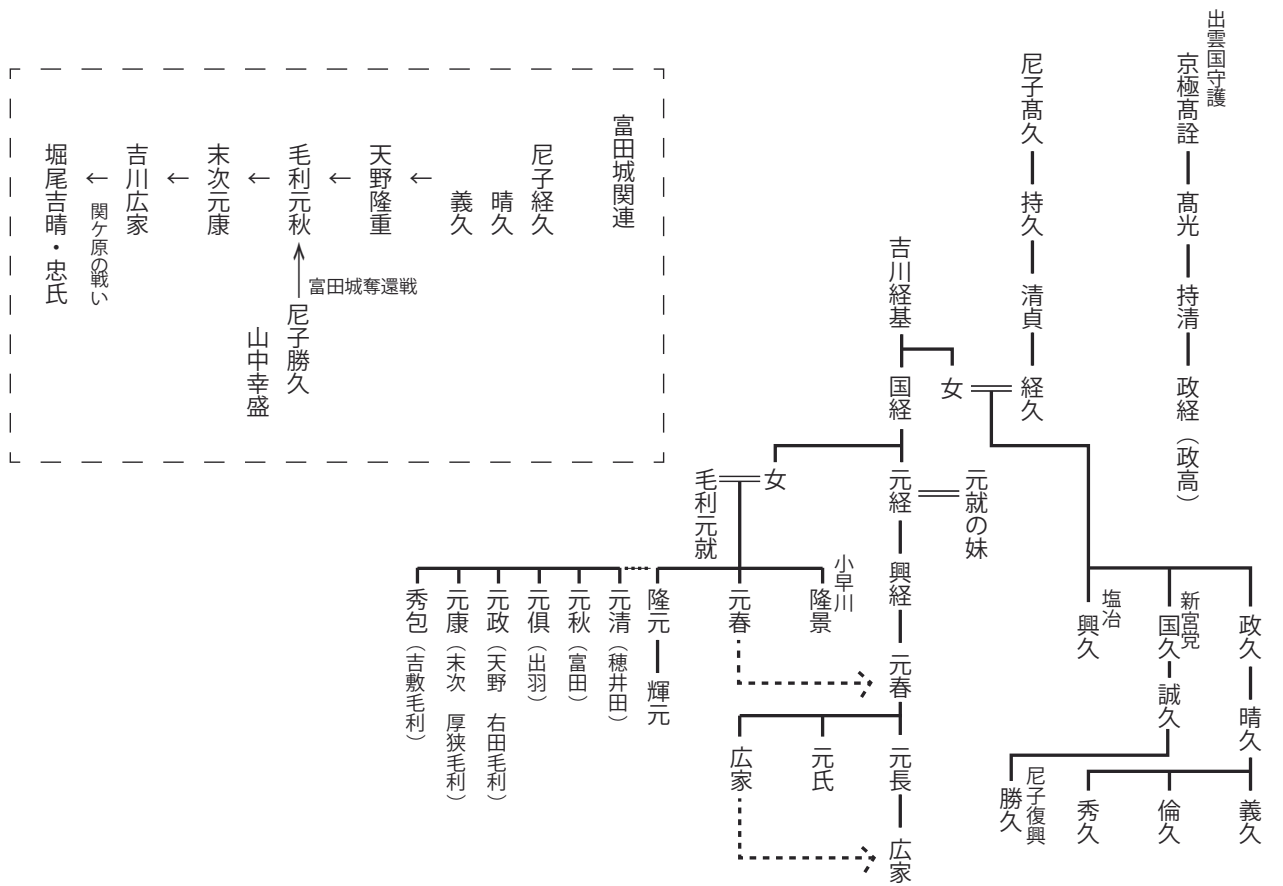
あった安来を掌握し、伯耆側からも攻めたて、補給路の遮断を行ってことも大きい。

(5) 合戦の勝敗と戦後処理が毛利氏、尼子氏、出雲・伯耆・因幡に及ぼしたもの

毛利氏は因幡は鳥取城の武田高信、東伯耆は羽衣石城の南条宗勝、西伯耆は尾高城の杉原盛重を中心とし、富田城を山陰支配の拠点とした。永禄12年(1569)に新宮党の尼子誠久の遺児、勝久を担いだ山中鹿介らが各地の尼子残党を結集させ兵(尼子復興軍)をあげた。但馬の山名祐豊の援助を受け丹後、但馬方面から船で渡り出雲へ侵攻する。一時は出雲から伯耆へも進み、毛利氏の支配下にいた国人の中には尼子氏に味方するものも現れ、再び出雲・伯耆は戦乱となっていく。布部山(安来市広瀬町)や三笠山城(牛尾要害)での戦いを制した毛利氏が次第に盛り返し、元亀2年(1571)には、尼子方の拠点であった出雲・真山城(松江市)も落城し、出雲・伯耆の尼子勢力は一掃された。このように毛利氏による富田城籠城戦の後も、火種が残っていたことが分かり、毛利氏は山陰地方を支配下に置いた後も、温湯城(島根県川本町)や、尼子復興軍の拠点であった真山城も、その後番衆を置き維持しており、不測の事態に備えている様子がうかがえる。

月山富田城籠城戦関連年表

1	永禄5年	1562	正月	湯原春綱が毛利方へ加わる
2	永禄5年	1562	6月	赤穴氏が毛利に加わる
3	永禄5年	1562	6月	福屋隆兼が福光城を攻める
4	永禄5年	1562	6月	日野郡の山名藤幸が「日野本城」を攻撃
5	永禄5年	1562	9月	備中の三村家親、因幡の武田高信らが富田城付近まで攻め入り
6	永禄5年	1562	7月	三沢氏、三刀屋氏を始めとする出雲国人が毛利に味方
7	永禄5年	1562	8月	毛利氏が富田城を構える
8	永禄5年	1562	9月	「富田一所にあい究まり候」
9	永禄5年	1562	11月	11月5日日本城常光を穴道の陣所で討ち果たす。熊野氏、米原氏、松田氏らが尼子方へ帰参する
10	永禄5年	1562	12月	この頃、毛利元就は荒隈城を築き、白鹿城と富田城を分断するため和久羅山城を築く計画を立てる
11	永禄6年	1563	5月	津田表(現松江市)、大東(現雲南市)、中蔵(意宇郡内)で両軍の戦いが起こる
12	永禄6年	1563	6月	尾高城(現米子市)、河岡城(現米子市)が毛利方につき、毛利家臣小寺元武や山田満重らが送り込まれる
13	永禄6年	1563	7月	備後の上原豊将を日野郡へ出陣させる。宮影盛、杉原盛重、山名藤幸らに尾高、河岡方面へ出陣させる
14	永禄6年	1563	8月	8月13日、毛利氏による白鹿城攻撃。小白鹿のほか諸丸が落ち、本丸のみとなる。
15	永禄6年	1563	10月	10月13日白鹿城小高丸で合戦が行われる
16	永禄6年	1563	10月	10月17日白鹿城落城
17	永禄6年	1563	11月	11月15日尼子方が弓ヶ浜で毛利方へ夜襲をかける
18	永禄6年	1563	12月	毛利方が長台寺城を攻撃
19	永禄7年	1564	正月	天満要害を毛利方が攻撃
20	永禄7年	1564	正月	この頃毛利元就が荒隈城へ入るか
21	永禄7年	1564	5月	天満要害が毛利方により落城
22	永禄7年	1564	5月	福楽城にて両軍の戦いが起こる。尼子方の多久三郎左衛門が討死する
23	永禄7年	1564	8月	江尾城の蜂塚氏ら日野衆が毛利に反旗を翻す。8月25日に制圧される。これを機に西伯耆も毛利方にほぼ制圧される
24	永禄8年	1565	正月	熊野城の熊野久忠が毛利に降伏し、福楽城、十神城も落城する。これにより出雲の大半、伯耆なども毛利氏によって制圧され、中海の制海権も掌握される
25	永禄8年	1565	4月	毛利輝元・吉川元長らの初陣として出陣。星上山に本陣を置き、八幡山、浄安寺山から飯梨川下流の植田の丘陵部に布陣。富田城下で麦薙ぎが行われる
26	永禄8年	1565	5月	「市庭面」で合戦が行われ、尼子方の蜂屋掃部が鉄炮で敵を攻撃
27	永禄8年	1565	5月	尼子義久が笠木与三左衛門尉に対し、白鹿城・十神山城での在番や、中井平三兵衛と同前に「新丸」に在城したことを責する
28	永禄8年	1565	5月	「星上退口」での合戦で、毛利方の井上春忠が尼子被官を討ち取る
29	永禄9年	1566	2月	富田城から落人が増えていることが報告される
30	永禄9年	1566	5月	富田城麓中須において合戦が起こる。井上春忠が尼子被官を討ち取る
31	永禄9年	1566	5月	「松尾中壑」にて鉢屋之賀茂三郎が合戦に及ぶ
32	永禄9年	1566	5月	「尼子義久家城七曲口」において合戦が行われる
33	永禄9年	1566	8月	これ以前に捨て置いていた毛利方の旗が回収される
34	永禄9年	1566	11月	尼子義久下城する



尼子氏・毛利氏・吉川氏関連系図



高屋茂男編『出雲の山城』2013より転載

尼子十旗位置図



- | | | |
|---------|----------|-----------|
| 1 武嶺山城 | 6 飯生山城 | 11 甲山城 |
| 2 赤崎山城 | 7 石原城 | 12 川手要害山城 |
| 3 福良城 | 8 独松山城砦群 | 13 勝日山城 |
| 4 車山城 | 9 正福寺裏城 | 14 経塚山城砦群 |
| 5 神庭横山城 | 10 新宮党館 | 15 寺山城 |

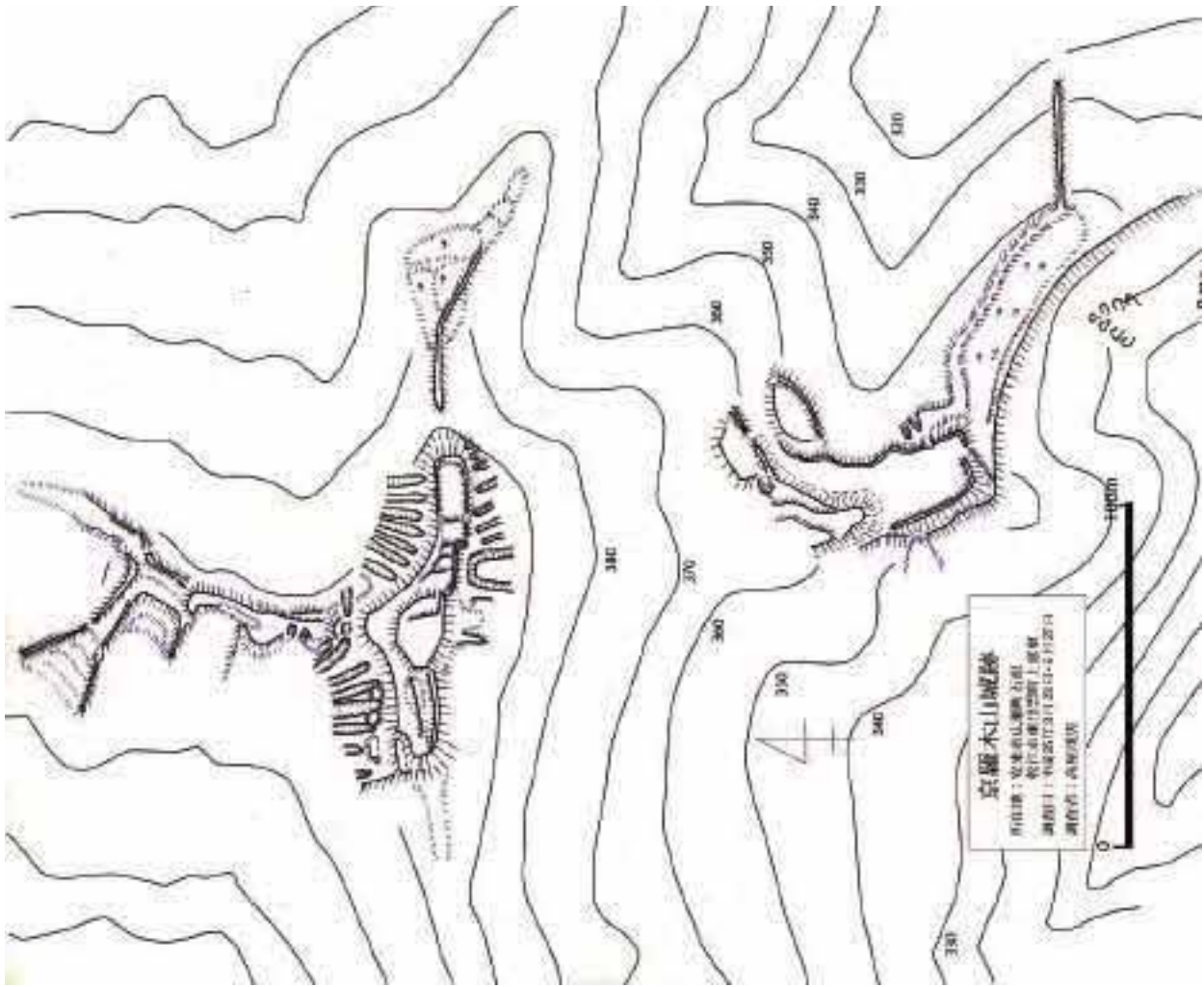
富田城周辺の城郭群（山根正明「富田城攻防戦」『島根県の合戦』2018）より転載



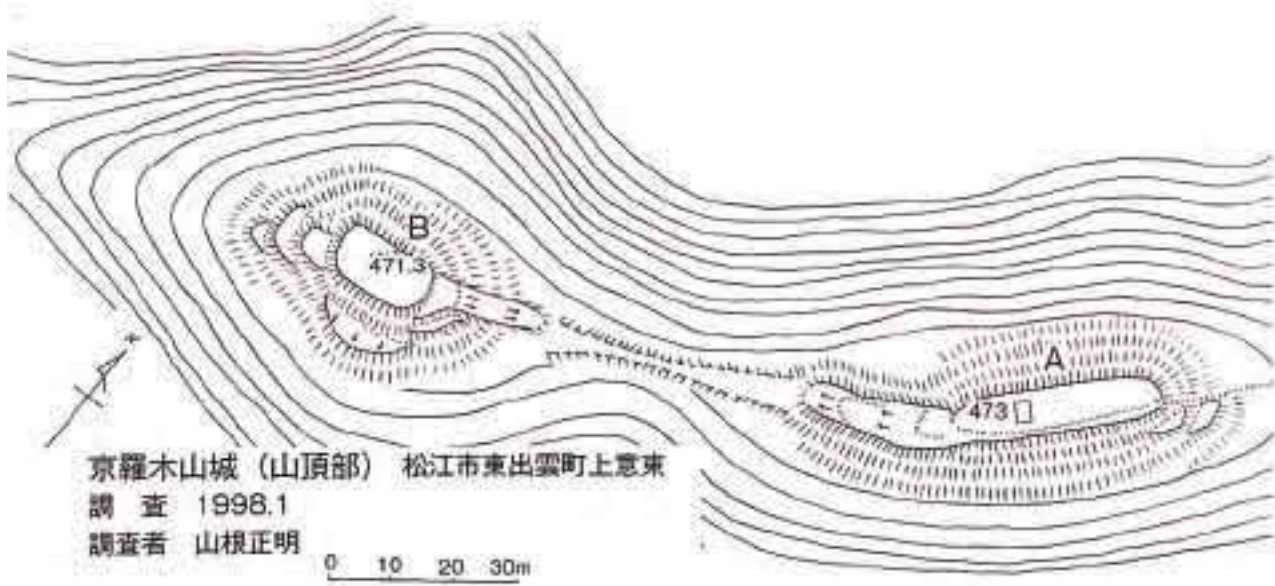
永禄8年(1565)段階の毛利氏による富田城包囲関係図
 「森脇覚書」に「ほしかみ山を御本陣にて、八幡淨安寺山・石原・うへ田之山迄、御陣取候」とある。



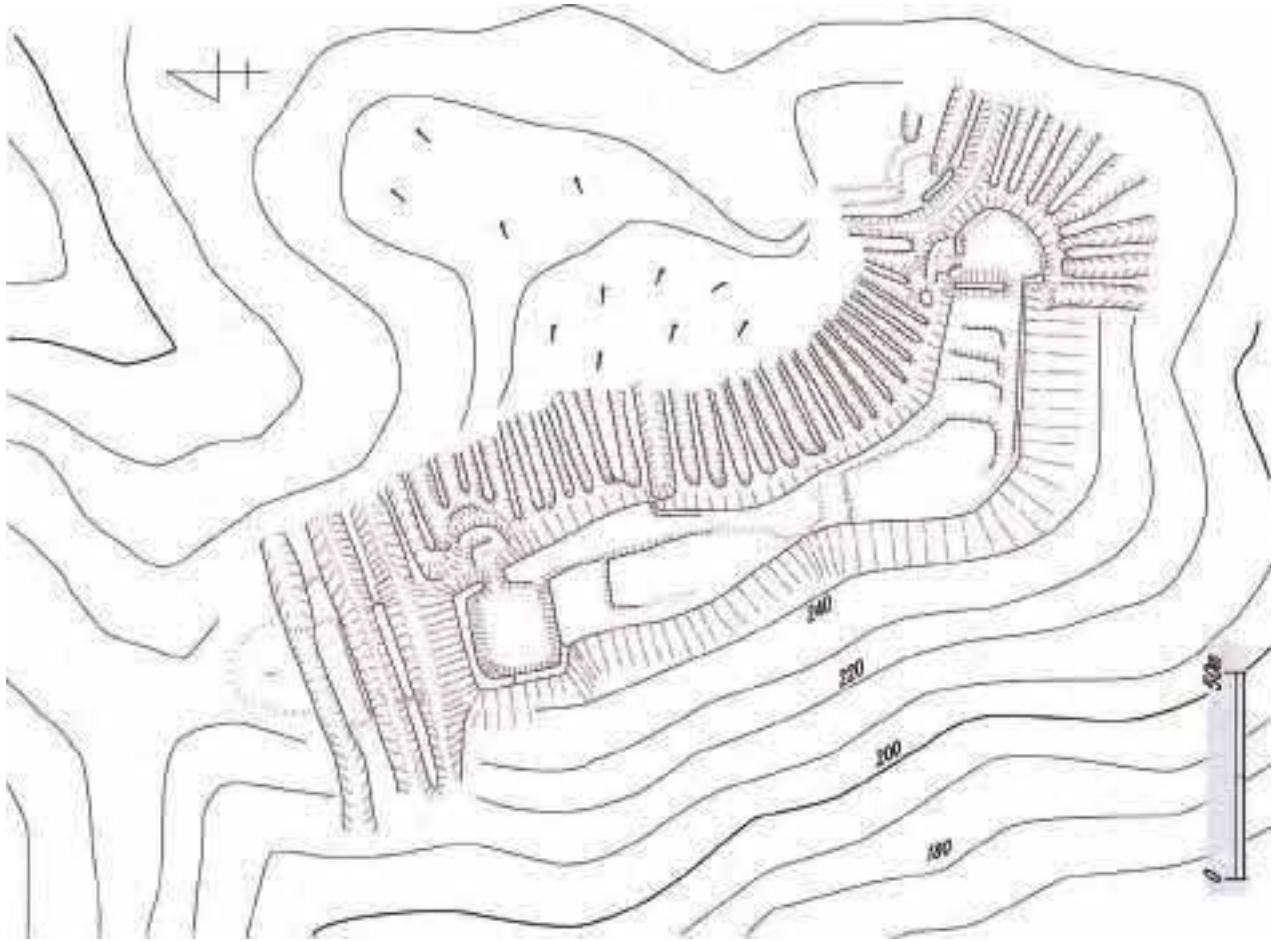
「森脇覚書」「二宮佐渡覚書」にみる永禄8年(1565)の毛利氏による富田城攻め関係図



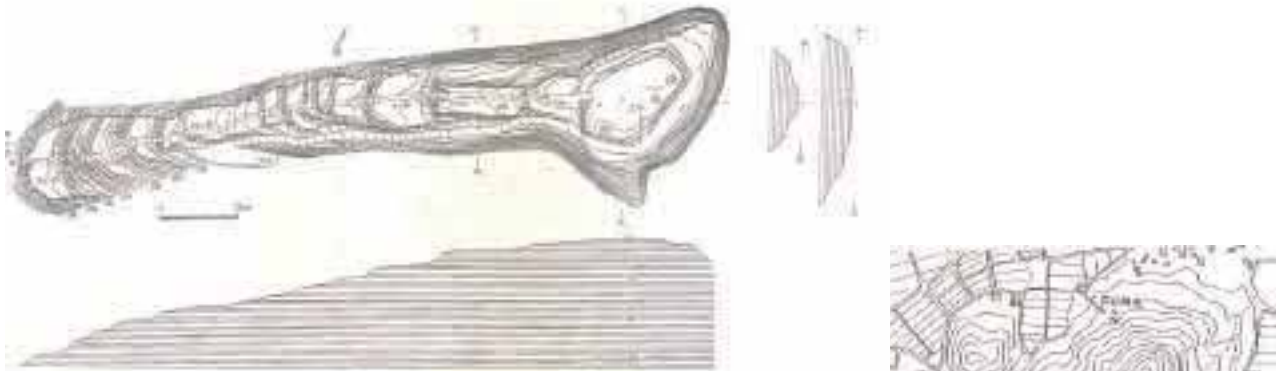
京羅木山城 (B) 縄張り図



京羅木山城 (A) 縄張り図



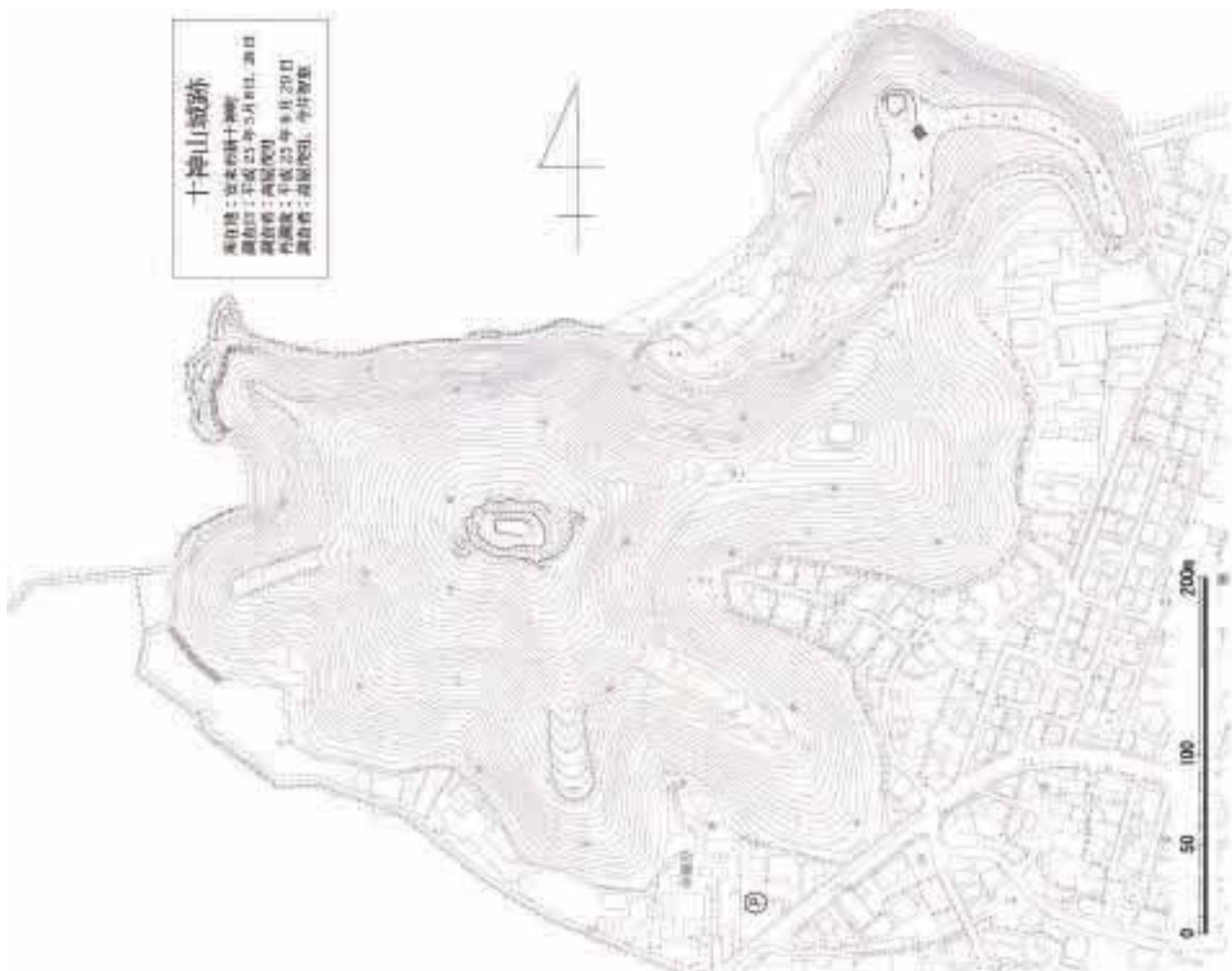
勝山城縄張り図



安田要害山城測量図（出雲・伯耆堺）



安田要害山城位置図（出雲・伯耆堺）



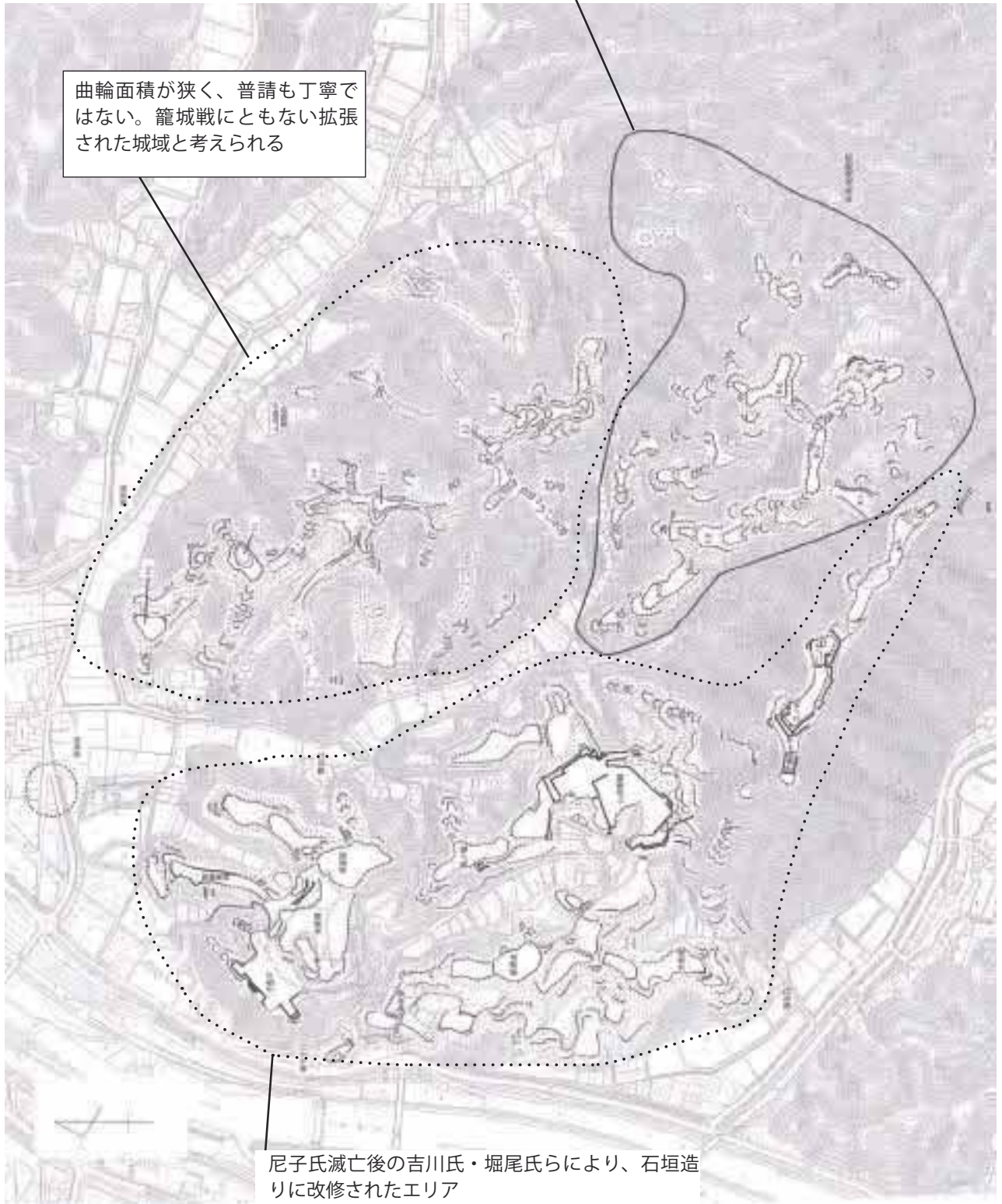
十神山城縄張り図



富田城模型 (安来市歴史資料館蔵)

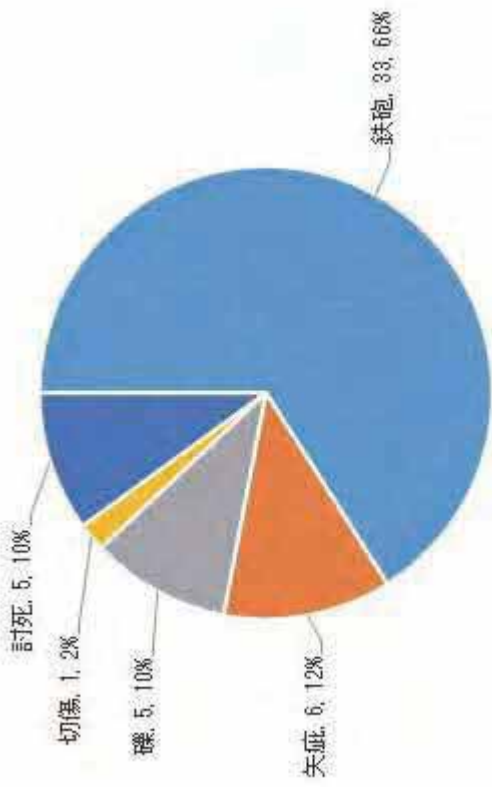
吉川・堀尾段階では放棄された尼子段階の遺構
曲輪面積が広く普請が丁寧で、山頂部と同様に尼
子段階の富田城の中枢を占める遺構

曲輪面積が狭く、普請も丁寧で
はない。籠城戦にともない拡張
された城域と考えられる

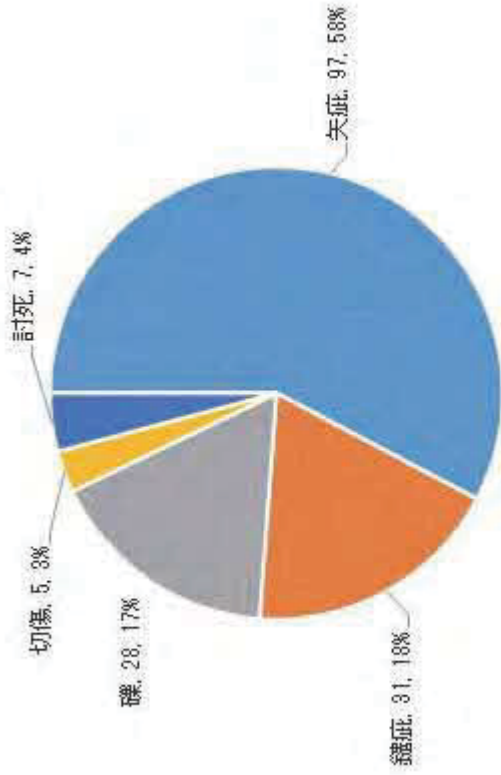


尼子氏滅亡後の吉川氏・堀尾氏らにより、石垣造
りに改修されたエリア

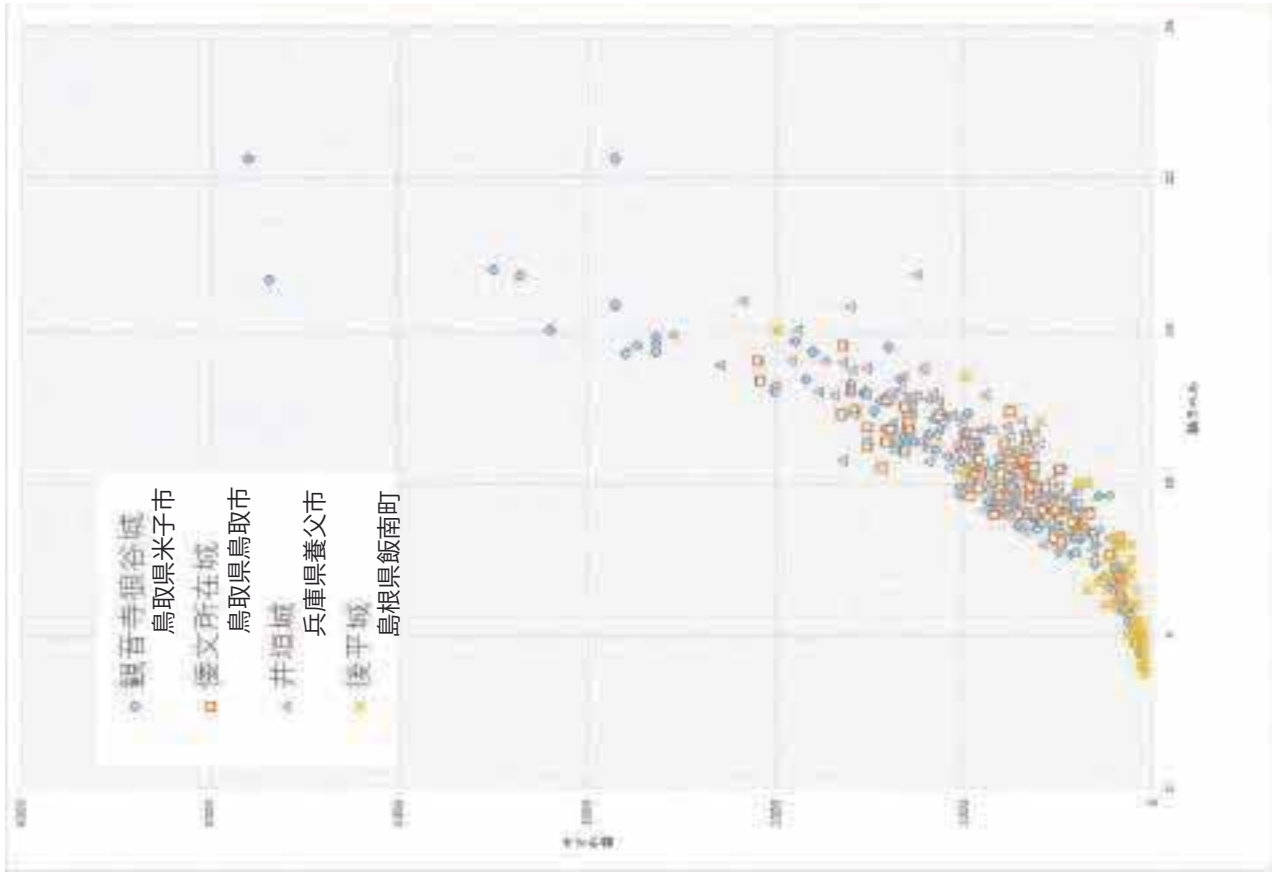
富田城縄張り図



天文21年8月28日付『毛利元就同隆元連署軍忠状』（『毛利家文書』293）



永禄6年11月13日付『吉川元春軍忠状』（『吉川家文書』511）



発掘調査された飛礮の重量表

秀吉の因幡侵攻 - そのとき東伯耆は -

眞田廣幸（倉吉文化財協会）

1 はじめに

(1) 十万寺所在城

- ・吉田淺雄は昭和 61 年に刊行された『伯耆南條羽衣石城跡之圖』で、羽衣石城の南に位置する十万寺集落に「比高 200m の高峻に壮大なる古城跡がある。村人の外知られていない。【たいこうがなる】と村人はそう呼ぶ。」と紹介
- ・羽衣石城の城主南条宗勝（?～1591）は、安芸郡山城合戦では尼子方で従軍。月山富田城籠城戦の第一次では大内方、第二次では毛利方で従軍する。宗勝の跡を継いだ南条元統（?～1591）と岩倉城主小鴨元清（?～1614）兄弟は、織田方として秀吉の因幡侵攻で重要な役割を果たす。

(2) 秀吉の因幡侵攻

- ・第一次因幡侵攻 - 天正 8 年 (1580)5 月中旬、羽柴秀吉が因幡に侵攻。同年 6 月上旬、鳥取城主山名豊国が降伏する。
- ・天正 8 年 9 月 21 日、山名豊国が重臣等によって鳥取城から追放される。
- ・第二次因幡侵攻 - 天正 9 年 6 月下旬、羽柴秀吉の先鋒隊が私部城に入る。同年 10 月 25 日、鳥取城落城。同年 11 月上旬、羽柴秀吉姫路に帰城。→鳥取の渴え殺し
- ・羽柴秀吉の三大城攻め＝三木の干殺し（兵庫県三木市）天正 6 年 (1578)2 月～天正 8 年 1 月
鳥取の渴え殺し（鳥取県鳥取市）天正 9 年 (1581)7 月～10 月
高松城の水攻め（岡山県岡山市）天正 10 年 (1582)4 月～6 月

2 伯耆と因幡の争乱

(1) 応仁・文明の乱の頃【応仁元年 (1467)～文明 9 年 (1477)】

- ・室町幕府管領の畠山氏と斯波氏両家の家督争いと、八代将軍足利義政の継嗣問題から細川勝元の東軍と山名宗全の西軍が京都を中心に戦を繰り広げる。
- ・その頃、山名氏一族が因幡、伯耆、但馬等の守護を務める。因幡守護－山名豊氏→豊時、伯耆守護－山名教之→豊之、但馬守護（山名惣領家）－持豊（宗全）→教豊→政豊。
- ・『応仁記』にみる山名氏の将。
因幡－持ノ瀬、伊達（田）、波多野、八（矢）部、山口等
伯耆－小鴨、南條、進、村上、田原、片山、山名一族等
但馬－塩谷、佐々木、太田垣、八木、田結庄、垣屋、田公等
※ 出雲の守護は京極氏（東軍）で、守護代の尼子経久が文明 18 年（1486）に自立。

(2) 伯耆の争乱

- ・文明 3 年 9 月 18 日 (1471.11/9)－伯耆守護山名豊之、伯耆由良島で自刃。翌年、前伯耆守護山名教之が伯耆へ下向するが、文明 5 年に病死。
- ・豊之死後、子の政之と叔父の元之の間で対立。政之を但馬守護山名正豊等が支援。元之は南条氏、尼子氏、赤松氏等が支援する。

- ・16世紀初頭になると、伯耆守護を継承した山名尚之と一族の澄之が対立。
これにより、伯耆国は「国総劇」と呼ばれる争乱状態になる。
- ・澄之は、出雲の富田城を拠点とする尼子経久の支援を受ける。尼子経久は天文2年(1533)の書状に「山名澄之に合力して、廿余箇年前に自ら伯耆に進軍した」と記す。
- ・尼子氏の伯耆侵攻によって伯耆国内の国人達は、国内残留が末次氏・日野氏・蜂塚氏・河岡氏・片山氏・小嶋氏・南条氏等。国外に退去した国人は、行松氏・村上氏・長田氏・山田氏等。

(3) 因幡の争乱

- ・文明11年(1479)、八頭町の私部城を本拠とする毛利(森)次郎が挙兵。毛利次郎は室町幕府の奉公衆である。
因幡守護山名豊時は、但馬守護山名政豊の支援を受け毛利次郎の乱を鎮圧する。
- ・長享元年(1487)、毛利次郎が山名一族の山名政実(新因幡守護)を擁立して再度挙兵するが山名豊時の完勝となった。
- ・永正9年(1512)、布施天神山城主山名豊重が討死。山名氏の分裂抗争。
- ・天文11年(1542)頃、因幡守護誠通が「久通」に改名。尼子氏の傘下に入る。この頃、但馬守護山名祐豊が大内氏と手を結び尼子氏勢力の排除に乗り出す。これに国外退去していた伯耆国人衆が参加する。
- ・天文21年(1552)、尼子晴久、因幡、伯耆、美作、出雲、隠岐、備前、備中、備後の守護に補任。

(4) 天正元年前後の因幡と伯耆

- ・永禄5年(1562)、出雲の尼子氏の進行によって国外に退去していた羽衣石の南条氏や尾高の行松氏、堤の山田氏らが、安芸の毛利氏の支援により帰国する。
- ・永禄6年(1563)春、因幡守護山名豊数の重臣武田高信が毛利氏につき山名氏から離反する。
- ・永禄9年(1566)11月21日、尼子氏の居城、富田城が落城。毛利氏の山陰支配 - 吉川元春(出雲/富田城)、杉原盛重(西伯耆/尾高城)、南条宗勝(東伯耆/羽衣石城)、武田高信(因幡/鳥取城)。
- ・永禄11年(1568)6月、毛利元就が北九州の大友宗麟を攻める。伯耆の国人たちも動員される。
- ・永禄12年(1569)6月、但馬の山名祐豊の支援を受けた尼子勝久引き入る尼子再興軍が出雲と伯耆へ進出するが、元龜2年(1571)8月末までには毛利軍によって一掃される。
- ・天正元年(1573)6月、尼子党が但馬から因幡に攻め込む。同年9月下旬、鳥取城は尼子氏の手に落ちる。因幡国人衆、毛利氏から離反。鳥取城には山名豊国が入り、尼子党の本体は私部を本拠とする。
- ・毛利輝元、野村士悦に「鹿野古城」普請を命じる。・同年11月、吉川元春が因幡に進出。山名豊国ら尼子党と手を切り、毛利方に味方する。元春、豊国らの人質を鹿野城に入れる。
- ・天正2年(1574)3月、吉川元春が因幡から退陣すると、尼子党が因幡で軍事活動をおこなう。
- ・天正3年(1575)正月、吉川元春と山名祐豊の和平に向けて合意。「芸但和睦」。
同年6月、尼子党が鬼ヶ城(若桜町若桜)を占拠。同年10月、吉川元春軍が私部城を落

- とし、鬼ヶ城周辺に付城を築いて芸州に帰国。翌年、鬼ヶ城落城する。
- ・この頃、武田高信と南条宗勝が相次いで、「不慮」の死をとげる。

3 南条宗勝の死

(1) 南条氏

- ・伯耆国河村郡の羽衣石城（湯梨浜町羽衣石）を拠点とする。
- ・出雲守護塩谷高貞の二男貞宗を始祖とする
- ・嘉吉の乱(1441)後には伯耆守護代に任じられるが、15世紀後半には反守護勢力として活動する

(2) 南条宗勝

- ・名一虎熊（幼名）→国清→元清→宗勝（入道号）。受領名一勘兵衛尉→豊後守。
- ・天文9年(1540)、尼子詮久（晴久）に従い 毛利元就の郡山城（広島県安芸高田市）攻めに参加。
- ・天文12年(1543)、大内義隆の月山富田城（島根県安来市）攻めに参加。
- ・天文15年(1546)、但馬山名氏の支援を受け、橋津川で尼子氏と戦うが敗れる。
- ・永禄5年(1562)、毛利氏の支援により羽衣石城に入る。

(3) 南条元統の相続

- ・天正3年(1575)10月、南条宗勝急死。死因は、南条元統起請文・小鴨元清起請文・南条信正外十四名連署起請文によると「不慮病死」と書かれている。また、『伯耆民談記』には尾高城主杉原播磨守による毒殺と記す。

【福山事件】 - 天正4年(1576)7月、久米郡堤城主山田重直が南条家臣の福山次郎左衛門を殺害。福山が織田方へ内通したことが露見したという。

福山次郎左衛門は尼子家の旧臣で、山中鹿介らと行動を共にした後、南条家に仕官する。事件後、南条元統は毛利氏に陳弁する使者を派遣する。

- ・山田重直は、久米郡堤城（北栄町島）の城主。尼子氏に追われて但馬の山名氏の下に逃れ、仕えた。永禄5年(1544)に毛利氏の支援で堤城を回復。南条氏の重臣として扱われるが、微妙な立場。

(4) 南条元統・小鴨元清兄弟離反

- ・天正7年9月1日(1579.10/1)、南条元統が山田重直を襲撃。重直父子は鹿野城（鳥取市鹿野）に落ち延びる。元統は、吉川元春へ釈明の使者を派遣し、「毛利家へ異心を抱いたのではない」と弁明。元春は、元統の釈明を時間稼ぎと見破っている。
- ・天正7年10月9日以前、八橋城衆が毛利氏に反旗するも、毛利氏が奪還。
- ・天正8年4月24日(1580.6/16)、南条元統と小鴨元清が、八橋城（琴浦町八橋）を前後2回攻撃するが、南条軍は撃退される。

4 秀吉の第一次因幡侵攻

(1) 天正8年

- ・5月ー 羽柴秀吉軍が因幡に侵攻。軍勢1万余とも。羽柴秀長も但馬衆3千から4千人を率いて因幡に侵攻。5月21日(1580.7/12)、先鋒隊が鳥取城下に到着。5月26日に鹿野城の攻撃を開始。秀吉、毛利方の人質を奪う。
- ・5月23日以前、南条元統因幡の気多郡に乱入し、青谷周辺で放火作戦を展開する。
- ・6月上旬、鳥取城主山名豊国、降伏し、6月13日(1580.8/3)には秀吉は姫路へ帰還する。
- ・翌天正9年の吉川経家の書状によれば、この時、秀吉軍は兵糧が不足だったようだ。

(2) 長和田表の戦い

- ・吉川元春軍、7月21日(1580.7/21)富田城を出発し、末石城(大山町末吉)に入る。湯原右京進宛元春書状に「後続部隊の到着を待って、船上山に陣替えするが、八橋と船上山の間には伝城と仕切之城を造る」とある。
- ・天正8年8月13日(1580.7/21)、羽衣石谷入口の「長和田」で吉川軍と南条氏が合戦。南条氏は「羽衣石城岸際」まで攻め込まれるが、羽衣石城は落城せず。元春は、南条勢を数百人討取る。

(3) 吉川元春、因幡へ

- ・天正8年9月1日(1580.10/19)、吉川元春が因幡国勝宿大明神(鳥取市鹿野町)に社領10石を「右、為当表弓箭任本意勝軍勝利、致寄進処之状如件」のため寄進。
- ・天正8年9月21日(1580.11/8)、山名豊国が重臣の中村春統・森下道誉等によって鳥取城から追放される。鳥取城は再び毛利方へ。
- ・天正8年9月下旬、鹿野衆が羽柴秀吉から派遣されていた亀井新十郎から離れ、鹿野城と羽衣石城の間に荒神山城を築き在城する。
- ・天正8年秋、因幡に秀吉軍の影。？毛利輝元が10月11日(11/27)に森脇氏と蔵田氏宛てに出した書状に「上勢少々因州へ打下候」とあることなど。

5 秀吉の第二次因幡侵攻

(1) 岩倉城のこと

- ・岩倉城(倉吉市岩倉)には、小鴨元清が立て籠る。
- ・小鴨家は、平安時代後期から続く名族。元清は南条元統と兄弟。元統と行動を共にする。
- ・毛利方は、岩倉城の付城として今倉城(島田の城/倉吉市福光)と打吹城(倉吉市仲ノ町)を構築し、それぞれ城番を配置。
- ・天正8年の暮れに打吹城周辺で、天正9年2月には岩倉の大宮で合戦。前者は南条方が敗北、後者は小鴨方が凌いでいる。

(2) 吉川経家、鳥取城へ

- ・吉川経家(天文16年/1547生まれ)ー石見国福光城主(島根県太田市温泉津町)
- ・天正9年1月14日ー吉川元春から経家に「鳥取城在番」の命が下る。
- ・2月26日(1581.4/9)ー福光城を発つ(「可立御用事覚悟之前候」)出雲国出雲郷で元

春に面会し、伯耆国八橋において山形筑後守就慶と合流。3月18日(1581. 5/1)に賀露に到着し、鳥取城に入る。「京家御弓矢之堺と申、日本ニかくれなき、名山鳥取ニ罷籠、当家之御用に罷立、名誉を留後代候はん事、古今未来之大望不可過之候」

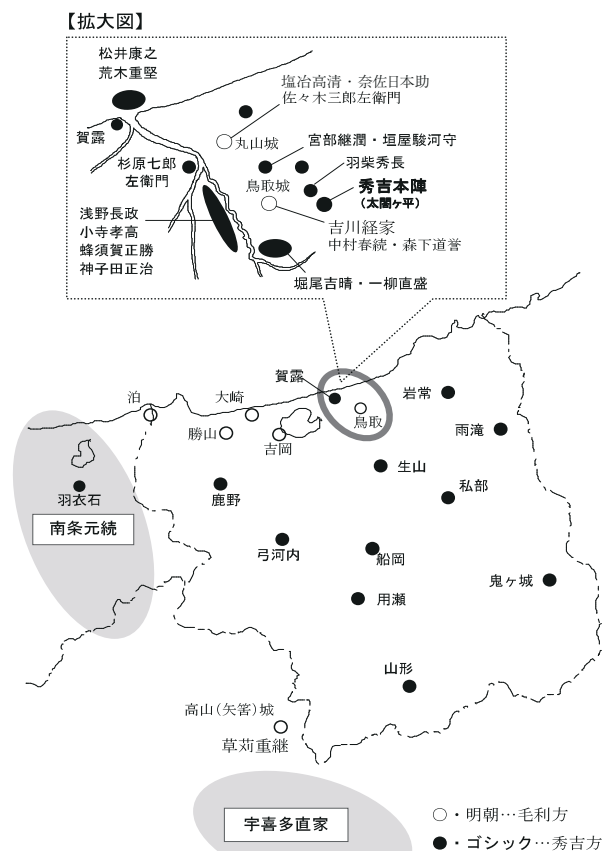
- ・鳥取城には因幡国方衆千人と芸州(毛利方)より加番衆四百人が立て籠る。
- ・吉川経家は、賀露と鳥取の間にある丸山城に山縣春佳や但馬衆の塩谷高清と奈佐日本助等を入れ、防衛体制を整え、羽衣石城や鹿野城の現状等のもとより、織田信長や羽柴秀吉の動向等の情報収集に努める。
- ・5月19日付け重富新五郎宛吉川経家書状に「秀吉軍は7月に攻めてくる・11月から大雪になるため、因幡に滞在するのは10月までであろう」と推測している。また、6月17日付けの書状では、「秀吉軍は因幡に侵攻後、まず勝山城(鳥取市気高町)・泊城(湯梨浜町園)・大崎城(鳥取市奥沢見)やその他の付城を攻略するだろう。これは8月から9月の間と思われる。その上で、鹿野城と羽衣石城へ合流し、八橋城を攻撃するか鳥取城へ攻め寄せるだろう。八橋城と鳥取城を堅固に守りぬけば毛利方の勝利だろう。しいて10月までの辛抱だろう。」などと記す。兵糧の確保が大きな課題。

(3) 秀吉の因幡攻め(第2次)

- ・6月29日(8/8)、羽柴秀吉軍の先鋒隊千五百人が私部城へ到着する。
- ・吉川経家が「兵糧を大至急届けてほしい」と吉川元春に懇願。
- ・7月7日(8/16)、上方勢(羽柴秀長軍)が鳥取城まで一里の湯山に着陣。

- ・秀吉は、6月27日(8/6)に姫路城を発ち、但馬の小代一揆を平定。9日まで小代に滞在し、後因幡に侵攻。12日(8/21)には鳥取城近くに陣を寄せる。
- ・秀吉は、宇喜多直家に送った書状に「小代一揆等悉討果候付而直因州表へ打出、鳥取之城押詰取巻候、明日十五日より取(砦)出数十四五丈夫二申付候、因州但州之もの共入置」と記す。・元春は、7月17日付けの書状に「上勢之儀、鳥執・丸山取詰候付而、陸路之通何無之候」と陸路が塞がれていることを記す。
- ・秀吉軍の陣配置については『山縣長茂覚書』にを次のように書かれている。・7月12日(8/21)の未明、秀吉は鳥取城の東北の高山へ本陣を構えた。鳥取城の南方には、堀尾吉春・一柳直盛が陣を構え、袋川の対岸には浅野長政・中村一氏・小寺(黒田)教高・蜂須賀正勝が陣を置いた。鳥取城と丸山城の雁金山には宮部継潤・垣屋駿河守が陣を張り、丸山城付近には

第2次因幡攻め関係図 [1581(天正9)年7~10月]



鳥取県 2007 『県史ブックレット1 織田vs毛利-鳥取をめぐる攻防-』から引用

羽柴秀長が在陣する。千代川渡し口には杉原七郎左衛門が陣を構え、河口には荒木重堅が数百艘で警固する。各陣地は、堀と柵を設け、十廿間に矢倉を構え、袋川には「乱杭縄綱を張る」など。【『山縣長茂覚書』は、吉川経家に従い鳥取城に籠城するが生還。寛永21年(1644)、経家の孫、正美に鳥取城の籠城戦等を記した本覚書を送った。】

(4) 羽衣石城付近での戦い

- ・5月4日(6/15)、羽衣石谷決叟寺(景宗寺?)で戦。5月15日(6/26) - 南条氏が水越城に兵糧を入れる際に、松崎城の敵が攻め寄せる。[6月4日と8月3日にも]
- ・5月16日(6/27)、羽衣石城から落人続出。6月17日(7/27)羽衣石城で内訌、小鴨某捕らわれる。
- ・7月6日(8/15)頃、吉川軍が馬野山で堀普請か。7月14日頃に完成したと思われる。
- ・7月21日(8/30)前、南条方の南条備前守と山田越中守が秀吉の陣に罷り上がり馬野山攻撃を進言する。・7月27日(9/5)、吉川軍が馬野山に置き兵糧を籠めようとした際に、南条軍が出撃してきた。また、8月20日(9/27)には、南条軍が橋津表と長瀬表で蒞田するが、吉川軍が撃退。- 兵站中継点としての馬野山を重視 -

(5) 連絡道の確保・

- ・7月中旬、吉川元春は、浜田や温泉津、江津、都野津等石見国内の諸港で船を調達し、兵糧や兵員を海上輸送しようとした。7月26日(9/4)の吉川元長書状によれば、7月22日に丸山城に兵糧等を入れているようだ。
- ・7月、丹後の細川藤孝の重臣松井康之率いる水軍が因幡方面へ進出。9月16日(10/23)には、松井水軍が泊城を攻撃し、毛利方の船65艘を切捨てるとともに城下に放火する。また、泊城の援軍にきた大崎城衆も追い崩し、大崎城下を焼き払う。さらに、松井水軍は9月24日(10/30)に雲伯境まで進出し、敵船を切り取っている。
- ・吉岡表の戦い - 7月19日(8/28)、吉岡安芸守が籠る亀山城(防己尾城/鳥取市福井)を秀吉軍が攻撃するが、敗れる。7月27日(9/5)と9月7日(10/14)にも亀山城に攻め寄せるが、いずれも秀吉軍が敗退する。
- ・三徳山合戦 - 8月13日(9/13)、毛利方の杉原盛重軍と南条軍が三徳山下で日中三度に渡り合戦をする。8月20日付けの織田信長の書状に「鹿野と伯耆の間の敵城に南条が攻め寄せ、城を落としたことは神妙に候」とある。敵城とは荒神山城のこと。南条軍の勝利か。

(6) 吉川元春の伯耆着陣

- ・9月9日(1581. 10/9)、吉川元春が八橋に着陣する。そして、9月22日(1581. 10/29)には、茶臼山城(北栄町国坂)に陣を構える。
- ・『陰徳太平記』には吉川元春と元長が羽衣石城の付城として「高野宮城」・「松之崎城」・「条山」を築いたと記し、その時期は天正7年12月23日とするが疑問。
- ・10月8日(11/14)付け吉川元長が周伯禅師に送った書状に「羽衣石令陣付、付城二ヶ所申付、漸普請相調候条」とあり、この頃に付城が完成か。

6 鳥取城落城

(1) 鳥取城の惨状

『信長公記』[…略…このたび因幡の鳥取では、一郡の男女ことごとくが城内に逃げ込んで立て籠もった。しかし、下々の農民その他は、長期戦の用意はなかったから、たちまち餓死してしまった。初めのうちは、五日に一度、あるいは三日に一度、鐘をつき、それを合図に、雑兵が全員で柵ぎわまで出てきて、木の葉や草を採り、特に稲の切り株は上々の食べ物であったようであるが、後にはこれも採り尽くし、城内で飼っていた牛馬を殺して食い、寒さも加わって、弱いものは際限もなく餓死した。餓鬼のように痩せ衰えた男女が、柵ぎわへまろび寄り、苦しみ喘ぎつつ「引き出して、助けてくれ」と悲しく泣き叫ぶ有様は、哀れで見るに堪えなかった。…略…](太田牛一著・中川太古訳『信長公記』新人文庫 KADOKAWA 2013)

(2) 吉川経家の切腹

- ・秀吉方は堀尾茂助と一柳市助、鳥取城内より野田左衛門尉が開城の交渉。
- ・秀吉方の条件は、山名豊国の重臣森下・中村兩名と、丸山城に籠る塩冶・佐々木・奈佐三人の切腹であり、吉川経久の切腹は無用とする。経久、承諾せず。
- ・天正9年10月25日(1581.12/1)、鳥取城に毛利方の城番として籠城を指揮していた石見の福光城主吉川経家が自刃する。
- ・秀吉軍は、降ってきた人々へ食事を振る舞った上で大崎城まで護送する。
- ・戦後の因幡国には、鳥取城一宮部継潤、鬼ヶ城一荒木重堅、岩常城一垣屋播磨守、鹿野城一亀井茲矩を配置する。

(3) 秀吉南条氏救援へ

- ・吉川元春・元長は馬野山(湯梨浜町橋津)で鳥取城落城の悲報に接し、吉川経安にお悔みの書状を10月27日(12/3)に出す。それには、「今日明日にでも羽衣石表で秀吉勢と一戦交える覚悟である」と記す。
- 『信長公記』の【伯耆国南条表発向の事】・10月26日(12/2)、南条と小鴨兄弟の居城を吉川が包囲したとの報告が秀吉にあった。このため先勢を出陣させる。
- ・10月28日(12/4)、秀吉が出陣し、鹿野城に入る。羽衣石までは「爰より伯耆へは山中谷合にて節所と云ふ事」とう難路だった。吉川勢は、羽衣石城から卅町ばかり隔て、馬野山に陣を構えていた。
- ・秀吉は、羽衣石城の近所に7日間在陣し、兵糧取り集め、蜂須賀小六・木下平太夫兩人を押への手として、馬野山へ差し向けた。そして、羽衣石と岩倉両城へ兵糧・玉薬を入れ、11月8日(12/13)、播州姫路に帰陣した。

7 おわりに

(1) 馬野山の対陣

- ・『伯耆民談記』等江戸時代の著された書物は、秀吉軍は主として海岸線に沿った移動としているが、疑問。

- ・『陰徳太平記』巻第六十五【於伯州馬野山吉川、羽柴対陣事】には、「…略…元春親子四人さああれば於是処秀吉を待受、一戦を可遂とて、其まゝ馬野山に陣を居給。…略…吉川元春出陣にて候と、伯州より告来ける間、秀吉さらば此勢に吉川を可討取とて、同二十七日羽衣石山続の高山へ打上、馬野山を山足に直下して屯を張給、其勢兼ては八万騎、又は六万余騎共聞えしが、左こそいへ只今打出る所の軍兵、四万五千もや有んずらんと見えたり。」とある。(香川宣阿『陰徳太平記』下 マツノ書店 2000年)
- ・11月8日(12/13)付け羽柴秀吉の書状に「…然処伯耆国内南条居城、毛利取巻候条、為後巻去廿七日令出張候処二、吉川本陣廿町計相開候間、押詰、南条江取続、令居城、兵糧玉薬来春迄、無機取様二差籠…」とある。20町は約2km。・『鳥取県郷土史』昭和7年(1932)「秀吉は26日、鳥取を発して鹿野に泊り、27日には、東郷池の東方なる御冠山に陣して、北方馬ノ山の吉川元春に対したが、兵数実に八万と号した。馬ノ山は標高107米のなだらかな山であって…略…御冠山は陰徳太平記には高山と見え、東郷池の東方に突刃たる山で標高186米馬ノ山を俯瞰する形勝の地である」。これが、高山＝御冠山の初出か。(鳥取県編『鳥取県郷土史』1932年)

(2) 羽衣石城落城

- ・天正9年11月8日(1581. 12/13)、秀吉、羽衣石城と岩倉城に兵糧・玉薬を入れ、姫路に帰陣する。
- ・同年11月30日(1582. 1/4)、吉川元春、馬野山を増強。12月10日、小寺又三郎を馬野山在番に命じ、間もなく帰陣する。
- ・天正10年(1582)春、吉川軍、因幡に侵攻し大崎城、荒神山城、吉岡城を攻略という。
- ・天正10年3月15日(1582. 4/17)、秀吉、備中に出陣。4月15日、高松城を包囲する。
- ・同年4月9日(1581. 5/11)、吉川元春、備中に出陣。八橋城に杉原元盛らに向け、4月21日には山田重直へ高野宮城の守りを堅くすることを命じる。
- ・同年6月2日(1581. 7/1)、本能寺の変
- ・天正10年7月26日(1581. 8/24)、吉川元春が山田重直に京芸間の和睦を説明し、伯耆進出遅延を詫げる。
- ・同年9月29日(1581. 10/25)、羽衣石城から南条氏退散。岩倉城も落城か。『陰徳太平記』には羽衣石城落城に続いて自落したと記す。
- ・天正11年(1583)、秀吉と毛利との領土確定交渉が始まる。同年末に南条元統が東伯耆の河村郡・久米郡・八橋郡(八橋城を除く)を与えられる。



秀吉の因幡侵攻関連城跡分布



羽衣石城関連の主な城跡

因幡・伯耆周辺地図



鳥取県 2007 『県史ブックレット 1 織田vs毛利-鳥取をめぐる攻防-』から引用

【主な参考文献】

- (1) 鳥取県編『鳥取県郷土史』鳥取県 1932年
- (2) 羽合町誌編さん委員会編『羽合町誌（前編）』羽合町 1967年
- (3) 松岡布政「伯耆民談記」（佐伯元吉編『因伯叢書（第二冊）』）名著出版 1972年
- (4) 蘆葉舎似猿人「羽衣石南條記」（佐伯元吉編『因伯叢書（第二冊）』）名著出版 1972年
- (5) 小坂博之『山名豊国』法雲寺 1973年
- (6) 竹内理三編『角川日本地名辞典 鳥取県』角川書店 1982年
- (7) 瀬川秀雄『吉川元春』マツノ書店 1985年
- (8) 吉田浅雄『伯耆南條羽衣石城跡之圖』燈心亭文庫 1986年
- (9) 高橋正弘『因伯の戦国城郭』通史編 1986年
- (10) 東郷町誌編さん委員会編『東郷町誌』東郷町 1987年
- (11) 香川宣阿『陰徳太平記』下 マツノ書店 2000年
- (12) 鳥取県教育委員会『鳥取県中世城館分布報告書』第1集（因幡編）2002年
- (13) 長谷川博史「毛利氏の山陰地域支配と因伯の諸階層」（長谷川博史『戦国期大名毛利氏の地域支配に関する研究』2000～2002年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告集）2003年
- (14) 鳥取県教育委員会『鳥取県中世城館分布報告書』第2集（伯耆編）2004年
- (15) 岡村吉彦『織田 vs 毛利ー鳥取をめぐる攻防ー』鳥取県 2007年
- (16) 湯梨浜町編『東郷荘絵図徹底解説ガイド』湯梨浜町 2009年
- (17) 岡村吉彦『尼子氏と戦国時代の鳥取』鳥取県 2010年
- (18) 高橋正弘『羽衣石・岩倉流転の記Ⅰ～Ⅵ』（NHK文化センター倉吉教室・短信）2010年～2013年
- (19) 谷本 進「因幡鳥取城攻めの陣城群」（織豊期城郭研究会『織豊城郭』第13号）2013年 (20) 播磨良紀「羽柴秀吉古文書の年次比定について」（織豊期研究会『織豊期研究』第16号）2014年
- (21) 依藤 保「羽柴秀吉の筑前守・藤吉郎通称考ー天正元年～天正十一年編年資料ー」（姫路市立城郭研究室『城郭研究室年報』VOL. 24）2015年
- (22) 鳥取県立公文書館 県史編纂室編『新鳥取県史』資料編 古代中世1古文書編上 2015年
- (23) 鳥取県立公文書館 県史編纂室編『新鳥取県史』資料編 古代中世1古文書編下 2015年 (24) 岡村吉彦『戦国末期の羽衣石城をめぐる戦いと南条氏』（湯梨浜町歴史講演会資料）2016年
- (25) 高橋正弘『武田高信没年に関する一考察 ～天正元年説への批判を中心に～』Kindle版 2016年
- (26) 岡村吉彦「織田信長の山陰出陣計画と秀吉の動向」（『鳥取地域史研究』第18号）鳥取地域史研究会 2016年
- (27) 鳥取県立公文書館 県史編纂室編『新鳥取県史』資料編 古代中世2古記録編 2017年
- (28) 城郭談話会編『織豊系城郭とは何かーその成果と課題ー』サンライズ出版 2017年
- (29) 高橋正弘『戦国因幡と武田一族 前編』Kindle版 2017年
- (30) 高橋正弘『戦国因幡と武田一族 中編』Kindle版 2017年
- (31) 高橋正弘『戦国因幡と武田一族 後編』Kindle版 2017年
- (32) 高橋正弘『戦国因幡と武田一族 余話』Kindle版 2019年

令和元年度 とっとり考古学フォーラム

戦国時代の転換点 3つの籠城戦を読み解く

－安芸郡山城、出雲月山富田城、因幡鳥取城－

令和元（2019）年9月1日 発行

発行 鳥取県埋蔵文化財センター

